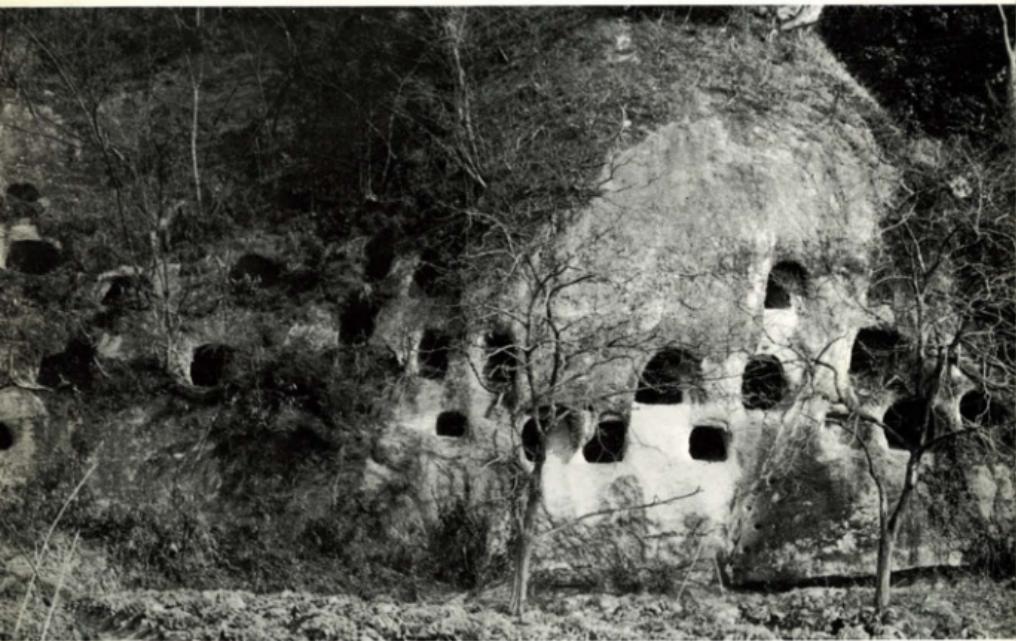


白石市文化財報告書第11号

白石市郡山横穴古墳群



宮城県白石市教育委員会

白石市郡山横穴古墳群

序

白石盆地の東北に位置する郡山の地域は、良質の白色凝灰岩を産する地域として知られ、現在も盛んに建築用材として切り出されています。こうした土質を利用してこの地内には沢山の横穴が築造されました。横穴古墳は凡そ5群を数えることができます。

このたび、そのうちの第1群にあたるエゾ穴横穴古墳群の記録保存のための調査を行なってきましたが、その調査報告書がまとまり発刊のはこびとなりました。

この報告書は、白石市の郷土史はもちろん、東北地方の上代史を究明するうえでも、重要な参考資料となると思います。ご活用くださいば幸に存じます。

最後に、この発掘調査にあたり、ご尽力いただいた白石市文化財保護委員会委員中橋彰吾氏はじめ、宮城県教育庁文化財保護室調査係長志間泰治氏、白石高等学校郷土史班諸君、ならびに調査協力者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和47年3月

白石市教育委員会教育長 小沢五郎

目 次

序 文

白石市教育委員会教育長 小沢五郎

はじめに	1頁
文献と研究のあゆみ	3
位置および周辺の古代遺跡	6
横穴の分布状況	8
各横穴古墳の状況	14
遺 物	22
考 察	23
おわりに	27
写真・図版	29

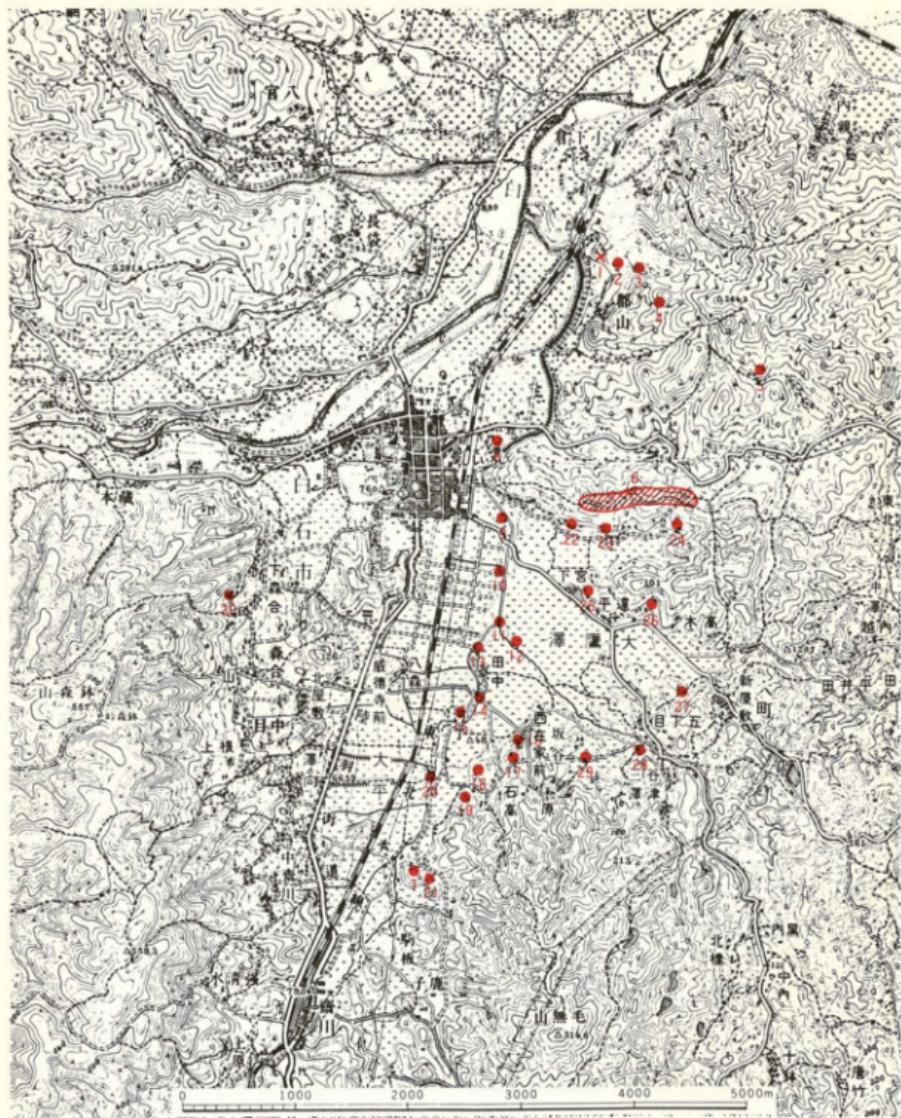
はじめに

郡山横穴古墳群は、昔から白石地方の人々が「蝦夷穴」と呼んで、語り伝えてきた旧跡の一つである。この蝦夷穴は、いまなお東北本線を走る列車の車窓からはっきりと見ることができる。白く露呈した凝灰岩壁面に、蜂の巣状にあけられた数十個の穴が、黒々と開口しており、その奇観は旅ゆく人々の目を見張らせるものがある。

郡山横穴古墳が開口したのはいつの頃か不明であるが、江戸時代（明和9年）には、ほとんどの横穴が開口していたことが、封内風土記で知ることができる。

以後今日まで伝説とともに200年、断崖に掘られたこの数十個の穴は、時々の子供たちにとっては、冒険や好奇心を満たす格好の対象となり、遊び場になっておった。また、穴を掘りひろげて貯蔵庫に転用したり、あるときには、乞食や浮浪者が住みついたりしたために、いくつかの大型の穴が埋められてしまったものもあった。このように蝦夷穴は、長い年月の間に人為的な破壊や変形をうけ、さらに風雪による自然崩壊も加わって、原形態が著しく損われつつある現状にあったため、白石市教育委員会では、実測調査を実施することになった。

1 遺跡所在地	白石市郡山字穴前19番地
2 調査期日	昭和45年1月4日～6日、2月15日、4月1日～2日
3 調査主体者	白石市教育委員会
4 調査担当者	白石市文化財保護委員 中橋彰吾
5 調査指導者	宮城県教育庁文化財保護室調査係長 志間泰治
6 調査参加者	白石高等学校郷土研究部員 村松龍樹、鈴木 稔、米沢忠重 須貝光宏、小川淳一、武田則男、阿了島香、大宮育雄、桜田 博
7 調査援助者	白石高等学校郷土研究部顧問 居坂知己、高倉 淳 宮城教育大学学生 土岐山 武 東北学院大学学生 久須見和正 白石市越河 宍戸定雄 白石市荒屋敷 遠藤盛勝



第1図 白石盆地周辺の遺跡分布図 国土地理院発行(白石・桑折図幅承認番号昭47.6152号2)

- | | | | |
|-------------|------------|------------|-----------|
| 1. 那山横穴古墳群 | 9. 北無双作遺跡 | 17. 久保沢遺跡 | 25. 宮下遺跡 |
| 2. 寺入西横穴古墳群 | 10. 白石冲遺跡 | 18. 久保沢山遺跡 | 26. 稲荷山圓跡 |
| 3. 寺入東横穴古墳群 | 11. 谷津川遺跡 | 19. 才ノ入遺跡 | 27. 塔ノ入遺跡 |
| 4. 金倉横穴古墳群 | 12. 江ノ下遺跡 | 20. 才原遺跡 | 28. 五丁目遺跡 |
| 5. 黒岩横穴古墳群 | 13. 田中遺跡 | 21. 弥平田遺跡 | 29. 原下遺跡 |
| 6. 麻栗古墳群 | 14. 二丈橋遺跡 | 22. 荒屋敷遺跡 | 30. 内田前遺跡 |
| 7. 龟田古墳群 | 15. 大柳前遺跡 | 23. 田手屋敷遺跡 | |
| 8. 本郷遺跡 | 16. 西山家山遺跡 | 24. 寺入屋敷遺跡 | |

文献と研究のあゆみ

郡山横穴古墳群についての記録は、明和9年（1772）の『封内風土記』⁽¹⁾が最初である。ついで安永6年の『風土記御用書出』⁽²⁾に記載されている。この2書はいずれも、郡山村の旧跡として穴数と伝承が簡潔に記されている。

明治45年刊の『刈田郡案内』⁽³⁾は、東北本線が開通し車窓からも蝦夷穴の特異な景観が見えるようになり、蝦夷の穴居跡という伝承のめずらしさもあって、観光案内的に記載されたものようであり、地名、穴数等の記載内容は信じがたい。

大正8年刊および以後発刊された、刈田郡役所編『宮城県刈田郡々治一班』は『刈田郡案内』をそのまま引用している。

『白石町誌』（大正14年刊）の刈田郡沿革概説⁽⁴⁾は誤りが多いが、白石町及び郊外の名所旧跡⁽⁵⁾の中で「蝦夷穴は、有史前後の穴居跡と伝えられているが、近來考古学者によってこの横穴はアイヌの墓所であると推定されている」と“横穴”という文字や穴居跡ではなく“墓所”であるとした記述が注目される。

昭和3年発行の『刈田郡誌』⁽⁶⁾は『封内風土記』や『刈田郡案内』などを引用しながらも、加えて、蝦夷の穴居跡ではなく、宝器を貯蔵した穴である。という新しい考察をしている。

昭和5年刊『日本地理大系』⁽⁷⁾には、遺跡の写真をのせて、これは蝦夷の穴居跡ではなく、上代墳墓の横穴である。と説明し、郡山地区に遺跡の存在する理由ものべている。

昭和6年発行の『宮城県通史』は、先住民族の遺跡として『封内風土記』の記載をそのまま引用している。

一方、昭和8年5月に考古学者鳥居龍藏博士が来白、郡山横穴古墳群などを視察、当日の公開講演会で「蝦夷の住居ではなく、我大和民族の墳墓である」と講演。昭和9年には、白石中学校長相原賢蔵氏が不忘新聞紙上に「蝦夷穴以上の群集墳を山地内に発見」⁽⁸⁾と報じたり、いろいろと考古学的な啓蒙はあったが、まだ機は熟さず当地の横穴古墳の考古学的調査はなされなかった。

戦後は、昭和25年刊『刈田郡詳鑑』⁽⁹⁾に飯沼寅治氏が、横穴古墳群の出現は古墳時代の末期であるとのべ、古墳造営の変遷、造営年代、さらに白石周辺の古墳時代の遺跡を記し注目された。同25年、白石郷土研究会が金倉横穴古墳群⁽¹⁰⁾を発見。昭和29年には、佐藤庄吉、高子直衛、連藤忠雄の3氏により市内考古遺跡の実地踏査が行なわれ、その結果を『白石地区古墳横穴調査報告書』にまとめたが未刊、昭和39年には、片倉信光氏が、郡山地域の横穴古墳群の分布調査を行い『郡山横穴古墳群調査概報』（孔版）として報告、昭和41年に『日本の

考古学』¹⁰⁾のなかで、はじめて東北地方における郡山横穴古墳群の編年的位置づけがなされ、現在にいたっている。

註

1 田辺希文著『封内風土記』明和19年郡山邑跡一。洞穴有五十二。土人呼之曰蝦夷穴。

傳云。上古蝦夷所居。(原文のまま)

2 『風土記御用書出』 安永6年

郡山村、一旧跡。一穴口一洞。六拾四。右者蝦夷穴と申伝較事。(原文のまま)

3 佐藤定松編『刈田郡案内』明治45年

蝦夷穴。白石町大字郡山字金倉にあり往昔穴居時代の遺物として轉た当時の跡を偲ばしむ。穴数三百余ありと云ひ傳ふれども、今は多くは埋れて二十余を存す。汽車にて白石を発し下ること數分にして、東山竹林の麓數個の洞穴の見ゆるもの、即ちこれなり。(原文のまま)

4 庄司一郎著『白石町誌』大正14年

『刈田郡沿革概説』の中で、金倉山南麓の蝦夷穴は今も車窓から見えるが、これは封内名蹟誌にも、白石本郷に蝦夷穴があり、往古は三百以上であった。と記しているが、封内名蹟誌には蝦夷穴についての記載はなく、穴数等は『刈田郡案内』によったと考えられる。

5 「白石町及び郊外の名所旧跡」註4参照。

郡山字金倉にある蝦夷穴は有史前後の穴居跡と伝えられているが、近來考古学者によって、此の横穴はアイヌの墓所であるとも推定されている。藩政時代までは穴数三百百余であったが、今は僅かに山中に埋没して、二十余を見るのみ。先住民族の集団生活地であることは事実なれど、未だ発掘して遺物を発見せず。(原文のまま)

6 刈田郡教育会編『刈田郡誌』昭和3年

第2章先住民族 遺跡

白石町字郡山に蝦夷穴と称するものあり、封内風土記曰く「洞穴52有、土人之を呼んで蝦夷穴と云ふ。上古蝦夷の居廻なり」と。識者、此の蝦夷穴は蝦夷の住居に非ずして、其之宝器を藏せる穴ならんと。其の何れなるによるも、蝦夷に關係のある遺跡なるを知る。(原文のまま)

7 『日本地理大系』第5巻奥羽編、昭和5年改造社刊

白石町郡山の蝦夷穴、宮城県白石町の内大字郡山金倉山にある。大小二十余開口しているが、もとは更に夥しい数であったといわれている。里俗之を蝦夷横穴と呼び、上古蝦夷の穴居した址と伝えているが、是が上代の墳墓たる所謂横穴であることはいうまでもない。地名郡山はこの附近が古への郡家の所在地であったことを示して居り、文化も早く開け、人口も相当稠密であったと思われ、上代遺跡の多く在するのは偶然でない(山本樹蔵)(原文のまま)

8 位置、穴数等くわしいことは不明で、この報文は疑問視されている。

9 『刈田郡詳鑑』 昭和25年

第1章刈田郡の歴史②古墳時代

此の時代の初期には墳墓として所謂古墳をつくり、末期になると横穴をつくった。凡そ1400年から1100年位前の頃であろう……。是の時代の遺跡が即ち白石町東部の瓶が森を中心とする40余の古墳と最近発見された斎川村鹿子の経塚と所謂「蝦夷穴」外2個所に群在する50余の横穴—古来蝦夷の棲んだ所といわれているが実は墳墓である。(飯沼寅治) (原文のまま)

10 昭和25年に白石郷土研究会員によって、十数基の金倉横穴古墳群が発見された。(飯沼寅治氏教示)

11 『日本の考古学』 古墳時代(七) 10東北 参照 昭和41年

位置および周辺の古代遺跡

郡山横穴古墳群は、白石市郡山字穴前19番地にあり、片倉信光氏が第1群横穴古墳⁽¹⁾とよんでいるもので、すでに開口している横穴群である。

東北本線白石駅の東北約2km、白石盆地東方の山塊から、盆地内に突出する山陵の一支脈の中にあり、山地南面の一部露呈した凝灰岩断崖壁面に、数段に蜂の巣状に開口している。
(図版1、1)

この郡山地域には、4群⁽²⁾の横穴古墳が点在し、本横穴群の東約100mの山地南斜面の4基が第2群(図版1、2)同山地石切場の東18基が第3群(図版1、3)、第4群は10基で東南約500mの山地内(図版1、4)にある。

白石周辺の横穴古墳群は、この郡山地域4群のほかに、大蔵山南麓に黒岩横穴古墳群13基⁽³⁾(図版1、5)がある。これらの各群の穴数は、分布調査によるもので精査すればもっと多くなるものと考えられる。

白石盆地は、ほぼ中央を南から北に貫流する斎が川の両岸に形成された沖積平地で、肥沃な農耕地となっているが、古代の白石地方も生活の中心は、盆地内での農耕であったと考えられる。これは盆地内および周辺にはたくさんのおかげで遺跡が発見されているし、かつてこの斎が川の改修工事の際に、河川敷や流域からはたくさんのおかげで土師器や須恵器が出土⁽⁴⁾していることからもうかがわれる。知名度の高い遺跡としては、

東北本線白石駅の東に突き出している鷹巣丘陵上にある、瓶ヶ盛前方後円墳(第12号墳)を主墳とする鷹巣古墳群⁽⁵⁾(図版1、6)と、盆地南端の山地にある亀出古墳群(図版1、7)がある。盆地内遺跡としては、本郷遺跡(図版1、8)北無双作遺跡(図版1、9)、白石冲遺跡(図版1、10)谷津川遺跡(図版1、11)江ノ下遺跡(図版1、12)田中遺跡(図版1、13)二丈橋遺跡(図版1、14)大柳前遺跡(図版1、15)西在家山遺跡(図版1、16)久保沢遺跡(図版1、17)久保沢山遺跡(図版1、18)才ノ入遺跡(図版1、19)才原遺跡(図版1、20)弥平田遺跡(図版1、21)、盆地周辺には荒屋敷遺跡(図版1、22)田手屋敷遺跡(図版1、23)寺入屋敷遺跡(図版1、24)宮下遺跡(図版1、25)稻荷山匂遺跡(図版1、26)塔ノ入遺跡(図版1、27)五丁目遺跡(図版1、28)原下遺跡(図版1、29)内田前遺跡(図版1、30)がある。これらの遺跡はすべて、土師器や須恵器の出土する遺跡である。このように白石盆地内や周辺のたくさんの遺跡および東側丘陵上に存在する高塚古墳群や横穴古墳群を考えてみても、この地域は古墳時代になると、肥沃な沖積平地を中心として開拓されていったことは容易に想像されるところである。

註

- 片倉信光、「郡山横穴古墳群調査概報」 昭和39年

当該横穴古墳群を第1群とし、さらに郡山地域内の3群、計4群の横穴古墳群が報告されている。

第1群 郡山横穴古墳群

第2群 寺入西横穴古墳群

第3群 寺入東横穴古墳群

第4群 金倉横穴古墳群

- 註1 参照

3. 昭和29年、佐藤庄吉、遠藤忠雄、高子直衛氏の実地踏査による。筆者も一部確認。

4. 白石高等学校郷土研究部、「斎川流域および北無双作遺跡の出土遺物」昭和44年

5. 片倉信光、「宮城県刈田郡白石町鷹巣古墳群調査報告」 昭和16年

片倉信光 「鷹巣古墳群調査概要」 昭和39年

白石市教育委員会 「鷹巣古墳群（第1号、第13号）緊急発掘調査報告書」 昭和42年

白石市教育委員会 「白石市鷹巣古墳群発掘調査概報」 昭和47年

横穴の分布状況

横穴の分布は、南面して露呈した凝灰岩断崖面に、東西約65mにわたってみられる。この65mのうち両端（西側約8m、東側約14m）を除き、中央の約45mのところに、3段から4段に密集して造成されている。横穴群の前面は、畑地から水田に続く平地であり、遠く白石市街が望まれる。

横穴の名称は、西側の上から下に1号～2号とし、順次東側に67号までの番号を付した。

本横穴群の西端は雑木林になっており、約200mで山地の終端になる。この地域では横穴は発見されないし、東端の67号附近から東方は竹林になるが、この地域にも横穴は造成されていないもようである。

1号墳から3号墳の分布は密集形態をとっているが、3基のほかは確認されなかった。また64号墳から東約14mの間には、65号墳～67号墳の3基が確認できたのみであった。

密集帯の中央より西方に分布する横穴は、玄門を有する、やや大型の横穴が多く、10号墳、15号墳、18号墳、21号墳、25号墳、28号墳は、本横穴群の最低部にあり、水田面からの比高は僅かに3m～4mの位置にある。中央部から東方に分布する横穴は、玄門のない小型の横穴が多く、西方横穴よりやや高い位置（水田面よりの比高5m）に分布している。60号墳から64号墳までは、水田面比高10mを超える最高所に位置している。

1号墳から28号墳の下には、かつて浮浪者が利用できないようにと、十数基の横穴が埋められていると伝えられているが、今回はその存在を確認できなかった。しかし横穴の存在を容易に推測し得る地形である。

42号墳附近から東方の断崖の下部は、横穴群前面を流れる斎川による浸食のあとと思われるが、この部分には横穴は造成されていない。

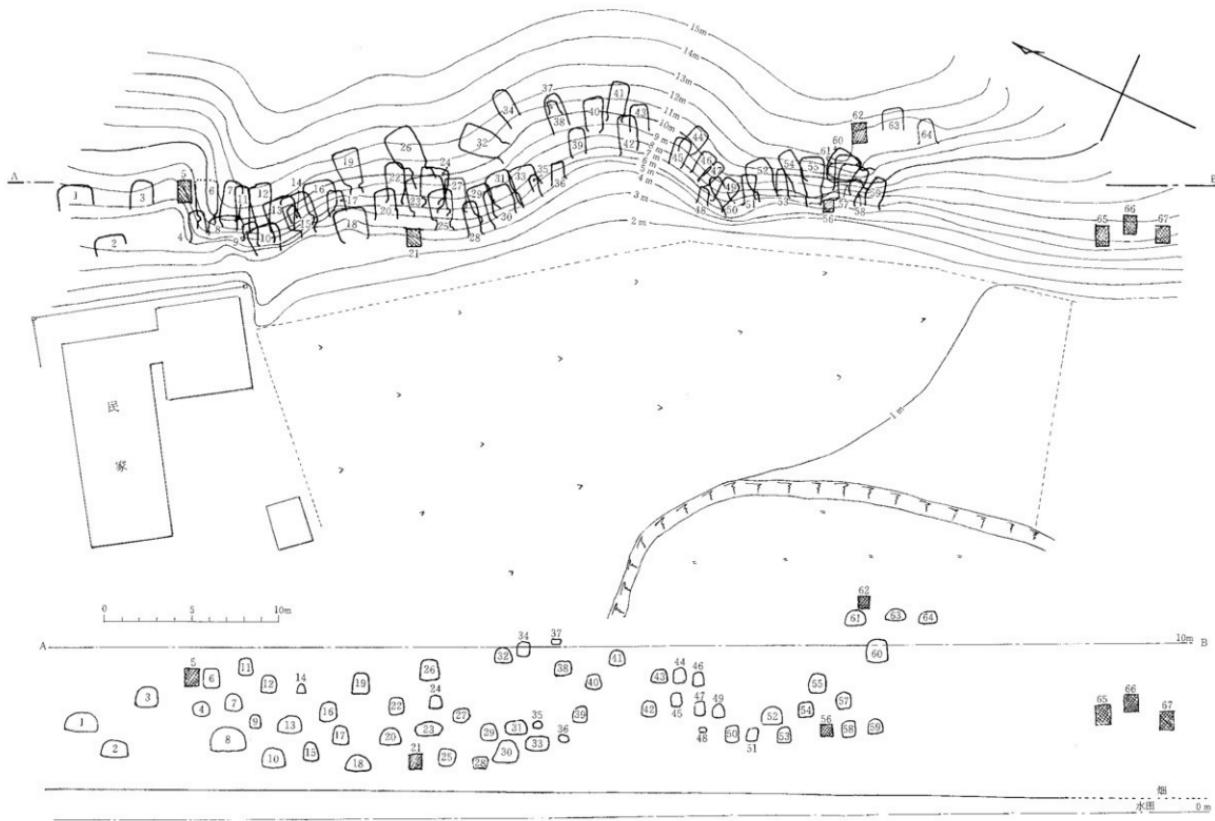
本横穴群のなかでも特殊な、玄室の長さ1m前後の最小横穴は、密集地帯中央部にみられ35号墳、36号墳、37号墳がそれであり、9号墳、14号墳は西側のやや高い所に、そして48号墳が東側の下部に位置している。

今回の調査で実測のできなかった横穴は7基ある。

5号墳は、6号墳と並列して造られていたと伝えられているが、現在はこの部分の岩壁が崩壊し、5号墳は消滅してしまっているし、6号墳も奥壁部が破壊されている。

21号墳は耕作地から出る小石の捨場になっており、玄室一杯に小石がつまっており、実測できなかった。

56号墳は未完成と考えられ、四角の浅い掘り込みで、62号墳は、現在貯蔵庫に改造されて



第2図 横穴分布状況 (■は崩壊や改修などで痕跡の不明なもの)

(東北地形社 藤井清治氏地形測図)

付表

構造 古墳	玄 室				玄 門				構造 古墳	玄 室				玄 門						
	長さ	幅	高さ	立面形	長さ	幅	高さ	立面形		長さ	幅	高さ	立面形	附塀溝	段落	長さ	幅	高さ	立面形	附塀溝
1号墳	?	176	121	ドーム?	?	?	?	?	?	35号墳	50?	55	38	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
2	?	196	121	ドーム?	?	?	?	?	?	36	88?	70	50	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
3	?	118	120	ドーム?	?	?	?	?	?	37	66?	58	40	変形ドーム	—	—	—	—	—	—
4	110?	94	94	変形ドーム	?	?	?	?	?	38	163?	107	73	変形ドーム	—	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	39	165?	95	88	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
6	?	124	132	?	26	76	108	アーチ	?	40	210	120	110	変形アーチ	?	?	?	?	?	?
7	255	108	106	変形ドーム	—	—	—	—	—	41	203?	99	100	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
8	?	215	159	ドーム?	?	?	?	?	?	42	200?	112	93	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
9	130?	84	78	変形ドーム	—	—	—	—	—	43	176?	116	82	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
10	?	175	126	ドーム?	?	?	?	?	?	44	170?	100	92	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
11	240?	85	138	変形アーチ?	—	—	—	—	—	45	150?	90	80	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
12	238?	114	135	アーチ?	?	?	?	?	?	46	142?	85	76	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
13	200?	174	116	ドーム?	?	?	?	?	?	47	184?	68	79	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
14	80?	52	60	変形アーチ	—	—	—	—	—	48	78?	50	40	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
15	218	180	118	ドーム	?	68	?	アーチ?	?	49	166?	93	86	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
16	200	184	131	ドーム	30?	84?	?	アーチ?	?	50	215	85	85	変形アーチ	—	—	—	—	—	有
17	140?	98	106	アーチ?	—	—	—	—	—	51	162	90	75	変形アーチ	—	—	—	—	—	有
18	214	299	111	ドーム?	?	?	?	?	?	52	193	154	99	変形ドーム	—	—	—	—	—	有
19	224	142	124	アーチ	20	40	?	アーチ	行	53	189?	61	60	変形アーチ	—	—	—	—	—	有
20	160?	121	106	アーチ?	?	?	?	?	?	54	192	85	73	変形アーチ	—	—	—	—	—	有
21	?	?	?	?	—	—	—	—	—	55	240	136	104	変形アーチ	?	?	?	?	?	?
22	218?	112	108	アーチ?	—	—	—	—	—	56	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	215	216	124	ドーム	?	?	?	?	?	57	200?	129	95	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
24	205	156	120	アーチ	?	70?	?	?	?	58	190?	151	93	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
25	190	141	120	アーチ	48?	78	?	?	有	59	170?	98	82	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
26	248	168	152	変形アーチ	32	84?	104	アーチ	有	60	190	178	102	変形アーチ?	52	84	92	ドーム	—	有
27	186	125	96	変形アーチ?	16?	84?	?	?	?	61	184?	96	92	変形アーチ	—	—	—	—	—	—
28	180?	93	71	変形ドーム	—	—	—	—	—	62	?	?	?	?	—	—	—	—	—	—
29	178?	126	97	変形アーチ	—	—	—	—	—	63	140?	124	84	変形アーチ	?	?	?	?	?	?
30	182?	160	144	ドーム?	?	?	?	?	?	64	150?	84	82	変形アーチ	?	?	?	?	?	?
31	183?	149	100	変形アーチ	—	—	—	—	—	65	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
32	243?	164	112	アーチ	—	—	—	—	—	66	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
33	186?	146	85	変形ドーム	—	—	—	—	—	67	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
34	194?	96	90	変形アーチ	—	—	—	—	—											

おり、65号墳から67号墳は崩壊の程度がひどく、いずれも実測が不可能であった。

本横穴群は、以上のようにある限られた一定の地域内に、数段に蜂の巣状に密集した分布状態を示すが、未確認横穴を含めると、その数は70基を超えるものと考えられる。

各 横 穴 古 墳 の 状 況

第 1 号 墓 (第 4 図)

本横穴は崩壊が著しく、玄室もすでに露呈しており、奥壁近くをのこすのみで玄室平面形や玄門部の構造は不明である。玄室立面形は、奥壁が内傾し弧を描いて天井と接し、ドーム状を呈している。内部は風化剝離がひどい。

第 2 号 墓 (第 4 図)

崩壊や剥落の程度、玄室の残存状態は、1号墳とほぼ同じようで、玄室立面形はドーム型を呈する。

第 3 号 墓 (第 4 図)

玄室の露呈したもので、残存の玄室平面形は長方形を呈し、立面形はドーム型に属する。玄室内部は風化剝落がひどい。

第 4 号 墓 (第 4 図)

3号墳より小型で、玄室が露呈しており、風化剝落が甚しい。玄室平面形は長方形、立面形はドーム状を呈している。床面は不整で、主軸方向に走るのみ痕がわずかにみられる。

第 5 号 墓

6号墳と並列する横穴と伝えられているが、この地域の崩壊により、消滅した。

第 6 号 墓 (第 4 図)

5号墳が崩壊したときに、本横穴の奥壁部も破壊されたと考えられる。玄室平面形は、長方形を呈し、立面形は、奥壁部が残存せず不明である。玄門を有し、玄門前面の構造は、羨道部を形成せず、直接前庭部となり、玄門天井が一段高くなり、前庭部天井と接続する。床面は傾斜が大きく、玄門前面の床面は崩壊がひどく、段落や閉塞用溝等の施設はみられない。玄室内部ののみ痕は明瞭で、その幅は6cmから7cmである。

第 7 号 墓 (第 5 図)

本横穴は、はつきりした玄門をもっていない。玄室側壁が、わずかに狭ぼまってはいるが玄門をなすものか、どうかは不明である。

玄室平面形は、横幅に比し、奥行が長い。立面形は、奥壁がつよく弯曲しながら、天井と接続し、ドーム状を呈する。天井は床面とほぼ平行しながら開口する。開口部附近の天井は人為的な変形がみられる。床面にはなんらの施設も発見されない。のみ幅は7cmから8cm。

第 8 号 墓 (第 6 図)

崩壊が甚しく、玄室が露呈し平面形は不明である。残存する玄室の幅は215cm、高さ159cm

と本横穴群のなかでは大型である。

玄室立面形はドーム状を呈し、内部は剥落が甚しい。

第9号墳（第5図）

横穴前面が崩壊し、玄室が露呈しているものであるが、本横穴群の中で、最小型のグループに属する横穴の一つである。玄室平面形は、直んだ長方形を呈し、立面形は奥壁が低く弯曲しながら内傾し、天井に接するドーム型に属する。のみ痕は不整で床面は凹凸がひどい。

第10号墳（第5図）

玄室が露呈し、玄室平面形は、主軸を中心にして左右非対称の直んだ方形を呈する。立面形はドーム形に属する。床面にはなんらの施設もみられない。

第11号墳（第5図）

玄室平面形は、奥行240cmに対して、幅85cmのせまい細長い形である。立面形は奥壁がやや直線的に内傾し、天井に接続する。奥壁と天井との境界は明瞭に判別でき、アーチ型に属する。本横穴には玄門がない。床面にも段落や閉塞用溝はみられない。

のみ痕は、玄室前半は横に、後半は縱に走り、のみ幅は7cmから8cmである。

第12号墳（第6図）

玄室平面形は長方形を呈し、立面形は11号墳とほぼ同形のアーチ型を呈している。

玄門は、玄室の両側壁が次第に狭まってきて、玄門を形成するもので、玄室平面形をみると両袖を形成しないものである。内部の風化剥落がひどく、のみ痕は不整で凹凸が甚しい。

第13号墳（第6図）

玄室平面形は、奥行が長く、一方の側壁が狭くなる、直んだ形をなして、奥壁と側壁の接点は隅丸状を呈している。立面形はドーム型に属する。床面には溝や段落等の施設はみられず、玄門部から前面は崩壊している。のみ幅8cmから9cm。

第14号墳（第6図）

本横穴群の中で、9号墳、35号墳、36号墳、37号墳、48号墳と共に、玄室の長さ、1m前後の最小横穴の一つである。

玄室平面形は脛張りの長方形で、立面形はアーチ状を呈する。玄室内整形は粗雑であり、床面は丸くくぼみ、のみ痕による凹凸が甚だしい。

第15号墳（第6図）

玄室平面形は、圓丸方形を呈し、立面形は奥壁の立ち上がりがいくぶん外傾したのち、次第に弧を描きながら内傾をつよめ、天井と接するドーム型を呈する。玄室内部は風化剥落がひどく、床面には溝や段落はみられない。玄門部から前面にかけては崩壊している。

第16号墳（第7図）

玄室平面形は、略方形を呈する。立面形はドーム型に属し、内部は15号墳と類似する。

第17号墳（第7図）

小型の横穴で、玄室の露呈しているものである。玄室平面形は長方形、立面形はアーチ型に属する。のみ痕は横方向で、のみ幅は5cmから6cm。

第18号墳（第8図）

玄室平面形は、隅丸方形を呈しているが、奥壁部が弧を描いており、歪んだ形になる。

立面形はドーム型に属し、玄室内部は風化剥落がひどい。床面には溝や段落の施設はみられず、玄門部は崩壊し、構造は不明である。

第19号墳（第8図）

本横穴は破壊をまぬかれた数少いものの一つである。

玄室平面形は長方形を呈し、奥壁より前幅が狭くなる形である。立面形は奥壁がやゝ垂直に立ち上り、わずかに内傾して天井と接続する。奥壁と天井の境界は一線を画し明瞭であり、天井は玄門部近くで曲線を描き、玄門天井と接するアーチ型に属する。

玄門前面の構造は、前庭部となり、天井が一段高くなり、前方にのびている。床面は、玄門直前に幅10cmの閉塞溝が造られている。

のみ幅は7cmから10cmで、奥壁全面に、のみによる刺痕で凹凸がみられる。

第20号墳（第8図）

横穴前面の崩壊により、玄室が露呈しているものである。

玄室平面形は長方形、立面形はアーチ型を呈する。のみ痕は玄室前半は縦に、後半は横にみられ、のみ幅は7cmから9cmである。

第21号墳

玄室内に小石が一杯つまっており、実測不可能であった。

第22号墳（第8図）

玄室平面形は不整な長方形を呈し、玄門はみられない。立面形はアーチ型に属する。

のみ痕は横に走り、奥壁面はのみの刺突痕で凹凸が甚しい。のみ幅は5cmから7cmである。床面は平坦で、溝や段落等の施設はない。

第23号墳（第9図）

玄室平面形は、左右の奥隅が直角をなさず、歪んだ方形を呈している。立面形はドーム型に属し、天井は大きく弧を描いており、玄室は中央で最も高くなる。床面には、溝や段落の施設はみられずのみ痕による凹凸がひどい。のみ幅は6cmから7cmである。玄門および前庭部は崩壊している。

第24号墳（第9図）

玄門を有する横穴である。玄室平面形は、やゝ胴張りの長方形である。立面形は奥壁が直線的に内傾し、玄門も傾斜が強くアーチ型（台形状）を呈している。床面には溝も段落もみられず、玄門前面は崩壊している。のみ痕は、玄室前半は縱に、後半分は横にみられ、奥壁は刺突痕による凹凸がひどい。のみ幅は6cmから7cm。

第25号墳（第9図）

玄室平面形は長方形を呈し、立面形は奥壁がやや直立して天井と接続し、その境界は判然としないがアーチ型に属するものであろう。玄門直前の床面間に幅10cmの閉塞用溝が残っている。玄室内部は風化剥落が甚だしい。

第26号墳（第10図）

本横穴群の中では、大型であり原形態のよく残っている横穴である。

玄門部前面は、直接前部となり渡道、羨門等の構造はみられない。

玄室平面形は、左右の側壁の長さが異っていて歪んだ長方形である。床面には、奥壁から140cmのところに、玄室を横断する高さ4cmほどの段落がみられる。これは当該横穴群にあっては唯一の棺床施設と考えられる。

玄室立面形はアーチ型に属する。奥壁はゆるやかな曲線で内傾し、天井と接する。その境界は両然とし、天井は玄門に向って高さを減じながらカーブして、玄門天井と接続する。前部床面には、玄門直前に幅10cmの溝があり、天井に接する左右の側壁にも幅10cmの彫り込みがある。これらは閉塞施設である。前庭部天井には、中央から右に折れるL字形（幅6cm）の朱彩が施されている。

玄門立面形はアーチ型を呈している。のみ幅は7cmから8cmである。

第27号墳（第10図）

玄室平面形は、玄門を有するやゝ小型の横穴で、長方形を呈する。立面形は、奥壁と天井の境界は判然としないが、アーチ型に属する。

床面は、玄門前面が破壊されており、閉塞施設等は不明である。のみ幅は6cmから7cmである。

第28号墳（第10図）

本横穴は、玄門のない、小型で単純な横穴である。

玄門平面形は、胴張りの長方形を呈し、入口近くでわずかに狭くなっている。立面形はドーム型に属し、天井の高さも低く、人がようやく入れる程度である。床面には、閉塞施設はみられない。内部は風化剥落がひどい。

第29号墳（第11図）

本横穴も玄門はみられない。

玄室平面形は、一方の側壁が入口で強く狭ばまる、奥行の長い歪んだ形である。立面形はアーチ型に属する。床面は平坦であり、溝・段落等の施設はみられない。のみ幅は6cmから7cmである。

第30号墳（第11図）

玄室の露呈したもので、内部は人為的な変形がひどい。

玄室平面形は長方形、立面形はドーム型を呈している。床面もひどく変形され、施設等は不明である。

第31号墳（第11図）

玄室平面形は、一方の側壁がくの字に屈曲している歪んだ長方形を呈する。玄室入口では狭ばまりをみせているが、玄門は造られていない。立面形は奥壁と天井の境界は判然としないが、アーチ型に属する。床面にはのみ痕による凹凸がみられる。

第32号墳（第12図）

玄室平面形は、側壁線が不整で歪んだ長方形を呈する。はっきりした玄門ではなく、両側壁が平行に狭ばまってくる形から、玄門部と想定できる程度で、両袖の形はみられない。立面形はアーチ型に属し、玄室内ののみ痕は縦にみられ、風化剥落が甚しい。のみ幅は8cmから10cmである。床面には、閉塞用溝や段落はみられない。

第33号墳（第12図）

玄室平面形は、一方の側壁が狭ばまる歪んだ長方形を呈し、玄門はみられない。

立面形は、奥壁が低く内傾し、さらに高くなる段階状を呈し、変形ドーム形に属するものであろう。内部は剥落がひどい。

第34号墳（第12図）

玄室平面形は、輪郭線の不整な歪んだ長方形を呈し、玄門構造はみられない。立面形はアーチ型に属している。床面はのみ痕による凹凸がひどく、閉塞用施設はみられない。側壁のみ痕は横に走っており、横穴も小さくて狭い。

第35号墳（第13図）

本横穴群にあっては最小のグループに属する。玄室平面形は、不整な長方形を呈し、立面形はアーチ型に属する。内部は風化が甚だしい。

第36号墳（第13図）

35号墳、37号墳とほぼ類似する横穴である。玄室平面形は歪んだ長方形、立面形はアーチ状を呈する。床面の傾斜は大きく、溝や段落はみられない。奥壁はのみの刺突痕で凹凸が甚しい。

第37号墳（第13図）

玄室の長さが1mにみたないものである。玄室平面形は長方形、立面形はドーム型を呈する。内部は風化剥落がひどく、床面には閉塞用施設はみられない。

第38号墳（第13図）

玄門がなく、小型で高さの低い横穴である。玄室平面形は、輪郭線の不整な長方形を呈する。立面形はドーム型に属する。床面は玄室入口で大きくくぼみ、閉塞用施設はみられない。内部は剥落が甚しい。のみ痕は横に走る。

第39号墳（第13図）

玄室平面形は、やや脛振りの長方形を呈する。

立面形はアーチ型に属する。玄門のない小型横穴で、人が横になれる程度の大きさである。床面は平坦で溝や段落はみられない。

のみ痕は横に走り、のみ幅6cmである。

第40号墳（第13図）

玄室平面形は長方形を呈し、玄室入口で側壁が両側から狭ばまり玄門を構成する。立面形は奥壁と天井の境界が判然としない、アーチ型を呈する。床面には閉塞施設はみられない。のみ幅6mから8cmである。

第41号墳（第14図）

玄室平面形は長方形を呈し、玄門がない。立面形はアーチ型に属し、犬井は床面と平行し、開口部に接続する。床面はのみ痕による凹凸がみられ、閉塞施設はない。内部は風化剥落がひどく、のみ痕は横方向である。

第42号墳（第14図）

横穴の規模は41号墳と類似し、腰をつかなければ入れない横穴である。

玄室平面形は長方形を呈し、玄室入口でわずかに狭まる。玄門はみられない。立面形はアーチ型に属し、床面には閉塞施設はみられない。のみ痕は横に走り、のみ幅は6cmである。

第43号墳（第14図）

44号墳、45号墳、46号墳、47号墳、49号墳、50号墳、51号墳、54号墳とほぼ同規模であり、いずれも玄門のみられない小型横穴で、人が入りにくいほどのものである。

玄室平面形は、輪郭線の不整な長方形を呈している。立面形はアーチ型に属し、天井は入口で最高になる。床面には溝や段落はみられず、のみ痕があらく凹凸がひどい。内部は剥落が甚だしい。

第44号墳（第14図）

玄室平面形は長方形を呈し、玄室入口でわずかに狭くなる。立面形はアーチ型に属し、床面には閉塞施設はみられない。のみ痕は縦方向にみられ、のみ幅は6cmである。

第45号墳（第15図）

玄室平面形は、一方の側壁の狭ばまりが強い、歪んだ長方形を呈する。立面形は、奥壁が垂直に立ちあがり、20cmほどで内傾し天井と接続する、変形のアーチ型に属するものであろう。床面のみ痕はあらく、閉塞施設はみられない。内部は風化剥落が甚だしい。

第46号墳（第15図）

玄室平面形は、45号墳とほとんど同形を呈する。立面形アーチ型に属し、床面には溝や段落はみられない。のみ痕は横に走り、のみ幅は4cmから6cmである。

第47号墳（第15図）

玄室平面形は、46号墳よりも一段と細長い長方形を呈し、立面形は奥壁が直立に近いアーチ状を呈している。床面の傾斜が大きく、のみ痕による凹凸が甚だしい。のみ痕は横方向にみられ、のみ幅6cmである。

第48号墳（第15図）

35号墳、36号墳、37号墳と類似する最小グループに属する横穴である。

玄室平面形は歪んだ長方形、立面形はアーチ状を呈する。内部は風化し、のみ痕による凹凸がみられる。

第49号墳（第15図）

玄室平面形は長方形を呈し、玄室入口でわずかに狭くなる。玄門構造はみられない。立面形はアーチ型に属し、天井は床面と平行し、開口部に接する。床面は平坦で、溝や段落はみられない。のみ痕は横に走り不整である。

第50号墳（第15図）

玄室平面形は、入口で狭くなる、やや歪んだ長方形を呈する。立面形はアーチ型に属し、天井はゆるやかな曲面を呈し、玄室入口で一段高くなり開口部に接続する。床面も、曲線的に入口に達して段落し、開口部に接続する。のみ痕は横位にみられ、不整であらく、床面や側壁も凹凸が甚だしい。

第51号墳（第15図）

本横穴の構造は50号墳と類似し、玄室平面形は50号墳より、やや不整である。奥壁と天井との境界は判然としないが、立面形はアーチ型に属する。床面は玄室入口で段落する。玄室入口下部は崩壊しており、前底部床面の構造は不明である。

第52号墳（第15図）

本横穴の玄室の幅は、51号墳のほぼ2倍である。

玄室平面形は隅丸で、玄室入口が狭まくなり歪んだ長方形を呈する。立面形はドーム型に属し、天井は玄室中央で最も高くなり、入口に向って高さを減じていく曲面を呈し、玄室入

口で一段高くなる。床面は玄室入口で段落し、溝等の施設はみられない。のみ痕は縦に走り、のみ幅は6cmである。

第53号墳（第16図）

本横穴は細長く、高さも低く、人が入りにくいほど小さいものである。

玄室平面形は細長くやや脇張りを呈し、立面形はアーチ型に属し、奥壁は20cmほどで低く、天井は徐々に高くなり、玄室入口で最高になる。床面は玄室入口で段落をみせる。玄室内は風化が甚しく、横位のみ痕があらく、凹凸がひどい。

第54号墳（第16図）

玄室平面形は長方形を呈し、玄門はない。立面形はアーチ型に属する。天井は玄室入口まで、床面と平行し、一段高くなる。床面は玄室入口で段落をみせる。のみ痕が横方向にみられ、のみ幅は7cmである。

第55号墳（第16図）

本横穴は、両側面が、玄室入口のところまで、徐々に狭ばまりをみせるが、はっきりした玄門をなさず、玄室平面形は、奥行の長い歪んだ形を呈している。立面形は、アーチ型に属し、奥壁と天井の境界は画然としている。

床面は、のみ痕による凹凸がみられ、玄室入口では、段落する。のみ痕は縦に走り、のみ幅は8cmである。

第56号墳

四角に約40cmほど掘り込まれてるが、未完成と考えられる。

第57号墳（第16図）

本横穴は玄門がない。

玄室平面形は、右側壁が強く狭ばまり、歪んだ長方形を呈する。立面形はアーチ型に属し、床面には、閉塞用溝や段落はみられない。

のみ痕は入口部は横に、玄室後半は縦にみられ、のみ幅は7cmである。

第58号墳（第17図）

玄室平面形は、57号墳と類似する歪んだ形である。立面形はアーチ型に属し床面や天井の構造は57号墳とほぼ同じである。内部は風化剥落がひどい。

第59号墳（第17図）

玄室平面形は、両側壁がわるく屈曲し、歪んだ長方形を呈する。立面形は、アーチ型で床面には、閉塞用溝や、段落はみられない。玄室内部は風化剥落が甚しい。

第60号墳（第17図）

本横穴は玄門構造を有し、原形態のよくのこっているものの一つである。

玄室平面形は、輪郭線のやや不整な、胴張りの方形を呈する。立面形は奥壁の内傾がつよくアーチ型を呈する。床面は玄門前面で段落がみられ、閉塞用溝は造られていない。

のみ痕は不整で、のみ幅は7cmである。

第61号墳（第17図）

本横穴はすでに玄室が露呈しているものである。玄室平面形は、玄門のない、長方形を呈し、立面形はアーチ型に属する。のみ痕は横方向にみられ、内部は風化剥落が甚しい。床面も溝や段落はみられず、のみ痕による凹凸がひどい。

第62号墳

貯藏庫に改造され、原形態は全く不明である。

第63号墳（第17図）

玄室の露呈した横穴で、玄室平面形は長方形、立面形はアーチ型を呈する。内部は風化剥落が甚だしい。

第64号墳（第17図）

63号墳と同じように玄室の露呈した横穴で、剥落がひどい。

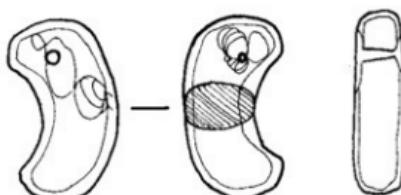
玄室平面形は、輪郭線の不整な長方形を呈し、立面形アーチ型に属する。床面はのみ痕による凹凸がひどく、溝や段落施設はみられない。

第65号墳、第66号墳、第67号墳は、玄室前面の崩壊がひどく、実測不能であった。

遺物

本横穴群からの出土遺物は、古来より伝えられたものもなく、今回の調査でも何一つ発見できなかった。

岡坂（第3図）の曲玉は、本横穴群前面の畠から採集したものである。褐色メノウ製で、両面の縁がわずかに磨り減らされている。穿孔は一方向からである。（白石市郡山字穴前、半田孝志氏所蔵）



第3図 出土曲玉

考 察

(1) 構造の問題

郡山横穴群の実測調査の結果は、全体的に予想外に原形態が損われていることが判明した。本横穴群を構造上からみると、宮城県南部に一般にみられる玄室、玄門、長い羨道、羨門、前庭といった構造形態⁽¹⁾をなさず、玄室、玄門、前庭の簡単な構造をもつものと、玄門がなく、玄室も筒形（無袖）の形態をもつ、単純な横穴の集合であった。

これらを構造的に大別すると次のようにある。

- 1 両袖式玄室、玄門、前庭の構造をもつ横穴。
- 2 玄室（無袖）、玄門（退化の様相を示し不定形になる）、前庭からなる横穴。
- 3 玄室（無袖筒形）と前庭からなる横穴。
- 4 玄室（無袖筒形）のみの横穴。

さて、一見単純な横穴の集合である本横穴群も、詳細に観察すると、相当数の特徴ある因子を抽出することができる。それに変化するものを加えると、非常に複雑な様相を呈してくれる。そこでこれらを次のように分類した。玄室の露呈したもの、破壊や風化剥落がひどく、形態の不明瞭な横穴は除いた。

I類=玄室、玄門、前庭を有するもの。

a. 玄室立面形アーチ型（変形を含む）玄室平面形長方形

19号墳、25号墳、26号墳、27号墳

b. 玄室立面形ドーム型（変形を含む）玄室平面形方形に近いもの

15号墳、16号墳、18号墳、23号墳

c. 玄室立面形アーチ型（変形を含む）玄室平面形方形に近いもの

24号墳、60号墳

II類=玄門部が退化（不定形）の様相を示し、天井に玄門のこん跡のみられるもの。

a. 玄室立面形アーチ型（変形を含む）玄室平面形長方形

12号墳、22号墳、32号墳、40号墳、55号墳

b. 玄室立面形ドーム型（変形を含む）

52号墳

III類=玄門がなく、玄室前に段落のあるもの

a. 玄室立面形アーチ型（変形を含む）

50号墳、51号墳、53号墳、54号墳

IV類=玄門がなく、玄室平面形が直んだ形のもの

- a . 玄室立面形アーチ型（変形を含む）

29号墳、31号墳、44号墳、45号墳、46号墳、57号墳、58号墳

- b . 玄室立面形ドーム型（変形を含む）

13号墳

V類=玄門がなく、玄室平面形長方形（筒形）

- a . 玄室立面形アーチ型（変形を含む）

34号墳、39号墳、41号墳、42号墳、43号墳、49号墳

- b . 玄室立面形ドーム型（変形を含む）

28号墳、38号墳

VI類=玄室平面形が細長い形のもの

- a . 玄室立面形アーチ型（変形を含む）

11号墳、47号墳

- b . 玄室立面形ドーム型（変形を含む）

7号墳

VII類=小形の特殊なもの（玄室の長さ1m前後）

- a . 玄室立面形アーチ型（変形を含む）

14号墳、35号墳、36号墳

- b . 玄室立面形ドーム型（変形を含む）

37号墳

以上VII類に分類したが、なかには形態上不明瞭な横穴もたくさんあって、どの範疇に属するか判別に困難なものもあった。

さて、本横穴群の構造各部分の変化を、全体的に考察すると、26号墳のように、前庭天井部にL字形の朱彩や、玄室床面のほぼ中央部には、高さ4cmの段落があり、台床施設とみられる特別な横穴もあるが、本横穴群は無台床横穴群で、横穴を構成する各部分の輪郭線の不明瞭なものが多い。

（2）閉塞の問題

本横穴群は、玄門部の破壊されたものや、玄門のない横穴が多く、閉塞施設を確め得た横穴は非常に少なかった。施設の確認できたものは、閉塞用溝を有するもの、3基、段落を有するもの7基（これは段落を利用して、閉塞するものと考えられるから、一応閉塞施設を有する横穴とみた）の計10基であった。

このほかに、閉塞施設は確認できなかったが、玄門を有する横穴は計7基あり、溝か、段

落のどちらかの施設をもつと考えられる。なお、カンヌキ穴のような施設は確認できなかつた。

この閉塞施設をもつ横穴を、構造的分類に挿入すると、

1 閉塞用溝を有する横穴

I類a 19号墳、25号墳、26号墳

2 段階を有する横穴

I類c 60号墳

II類a 55号墳

b 52号墳

III類a 50号墳、51号墳、53号墳、54号墳

3 玄門を有し、施設を確認できないもの

I類a 27号墳

b 15号墳、16号墳、18号墳、23号墳

c 24号墳

不明なもの、6号墳となる。

このように、本横穴群は、長い羨道や、羨門をもたず、閉塞施設も2種類を確認できたのみであり、本来一重閉塞の横穴群であったと考えられる。このためか、早い時期に開口してしまい、世に知られてきた横穴群であったともいえる。

今回の調査では、閉塞に使用された積石や用材の発見は皆無であった。横穴が墳墓として、本来閉塞し秘匿されてきたと考えるならば、玄門や閉塞施設をもたないものや、特殊な小形横穴の閉塞方法は、どのようなものであったのだろうか、このような点も今回は解明できなかつたが、今後の研究課題としたい。

(3) 編年の問題

本横穴群は、開口の時期も古く、出土遺物も皆無であるため、本横穴群の編年考察は不可能に近いと思われる。そこで編年考察というよりも、一応形態や構造上から、この問題を整理し、今後の継続研究としたい。

(1) はじめに本横穴群の形態の変化を、時間的経過と考えてみた。

本横穴群の形態の変遷は、

1. 玄門を有する両袖式横穴（I類）→2. 玄門が退化の様相を示し、両袖式玄室を形成しない横穴（II類）→3. 玄門のない横穴（V類）となるが、この形態の変化を時間的（年代的）経過と考えた。

つぎに、このV類の玄門のない横穴を、南関東地方の形態変遷¹⁰⁾を、そのままあてはめる

ものではないが、終末期横穴の一形態と考えたい。

(2) 閉塞施設の先後と玄室平面形について

本横穴群の溝と段落の2種の閉塞施設の先後については、明確にとらえることは不可能かもしれないが、この施設をもつ横穴の形態の変遷をみると、

1. $\left\{ \begin{array}{l} \text{閉塞用構造} = \text{I類a (26号墳)} \\ \text{段落構造} = \text{I類c (60号墳)} \end{array} \right\} \rightarrow 2. \left\{ \begin{array}{l} \text{段落構造} = \text{II類a (55号墳)} \\ \text{II類b (52号墳)} \end{array} \right\} \rightarrow 3. \text{段落構造、}$

III類a (50号墳) $\rightarrow 4. \text{閉塞施設のないもの、V類}$

のような、施設をもつ横穴の先後が考えられそうである。

つぎに、玄室平面形の単位群としての、先後については、善応寺横穴群の調査報告書⁽³⁾のなかで、多少疑義があるとしながらも、一般的傾向としては、方形から→長方形への序列が成立するとされているが、本横穴群については確認できず、一応平行し得るものと仮定した。このようなことから、本横穴群の推移編年を次のように考えた。



(3) 本横穴群のI類からV類への変遷が、連続するものと考えると、I類横穴の造営実年代とV類横穴の終末実年代の解明が重要な問題となるが、出土遺物もなく、白石周辺の横穴古墳の研究も進んでいない今日、結論を急ぐことを避け、今後の研究課題としておきたい。

註

- (1) 氏家和典 「辺境における横穴古墳群の諸問題」『日本の考古学の諸問題』所収・昭和29年。「東北の横穴」『考古学ジャーナル6』所収・昭和42年。
- (2) 赤星直忠 「横穴の編年について」『鎌倉市史考古編』所収・昭和33年。
- (3) 仙台市教育委員会 「仙台市燕沢善応寺横穴古墳調査報告書」昭和43年。

お わ り に

実測調査の結果、たくさんのが問題が浮彫にされてきた。

1. 終末期横穴の構造の変遷と閉塞施設および閉塞方法
2. 本横穴群の造営開始と終末年代
3. 本横穴群の被葬者とその社会的背景
4. 特殊な小形横穴の性格と使用問題

その他、いろいろ重要な問題の解明については、今後の白石地方の横穴古墳の研究に待ち、慎重に検討を加え、解明していきたい。

本調査を実施するにあたって、宮城県教育庁文化財保護室調査係長・志間泰治氏には終始ご指導を賜わり、本稿を草するにあたっては、ご校閲を頂いた。厚く感謝の意を表します。

また、白石市文化財保護委員長・片倉信光氏には、数々のご教示と資料の提供をうけたほか調査にあたっては白石高等学校郷土研究部・居坂知己・高倉淳爾顧門、宮城教育大学生・上枝山武氏、東北学院大学生・久須見和正氏、白石市越河・穴戸定雄氏、白石市荒屋敷・通藤盛勝氏、地主の高子武氏から多大のご協力を頂いた。また、調査が円滑にできたのは、白石市教育委員会社会教育課長・佐久間克、社会教育主事・太斎亨爾氏のご尽力によるところが多い。記して心から謝意を表するものであります。

図 版



写真1 郡山横穴周辺航空写真（国土地理院承認番号昭和47第6152号）

T O - 70 - 8 Y C 8 - B - 10

写真2. 郡山焼六古墳群全貌

写真3. 曲玉
(鏡穴前の骨からの採集)

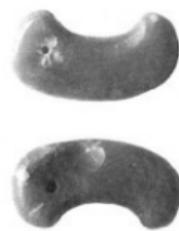




写真4 那山横穴古墳群遠景

写真5 26号墳玄室より白石市街を望む

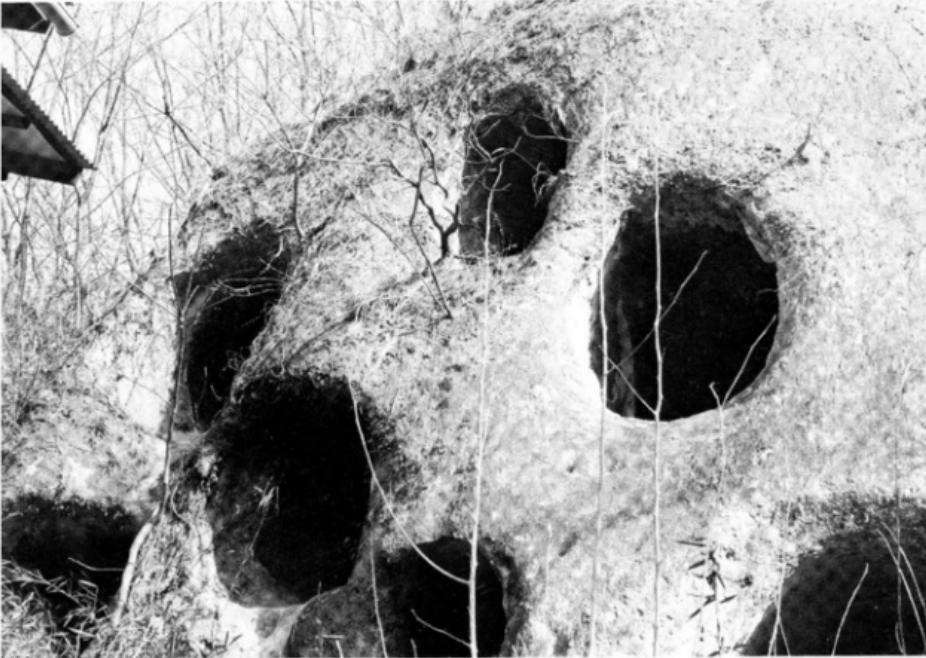
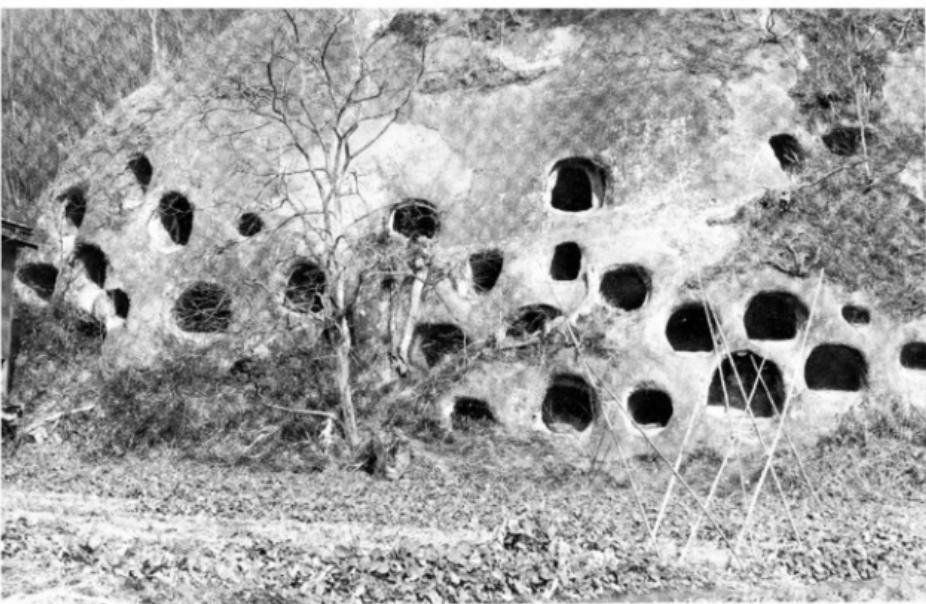


写真6 西側横穴の状況

写真7 西側横穴玄門部の状況

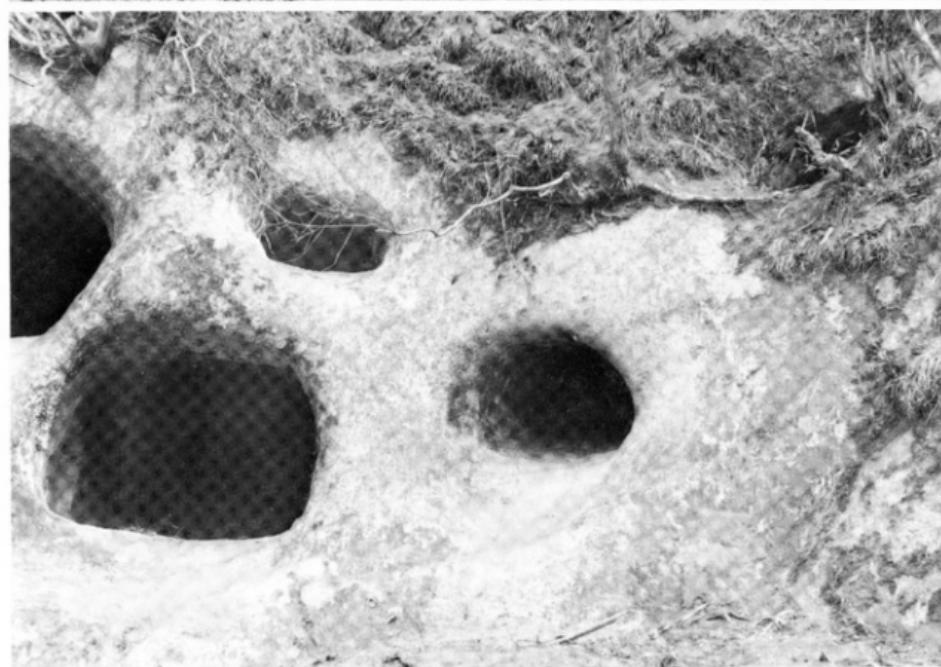
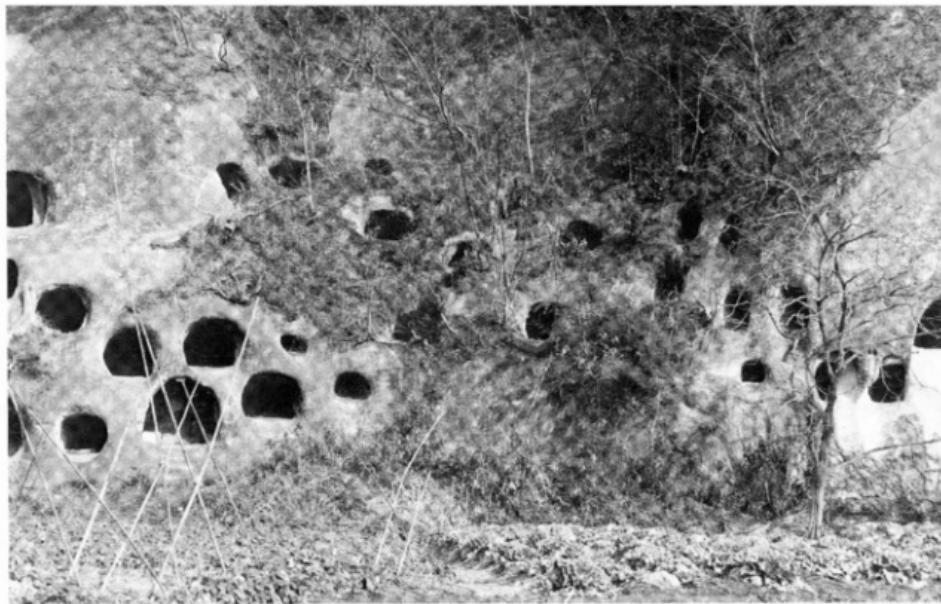


写真8 中央部横穴の状況

写真9 中央部小型横穴の状況（上が25号墳、右が36号墳）

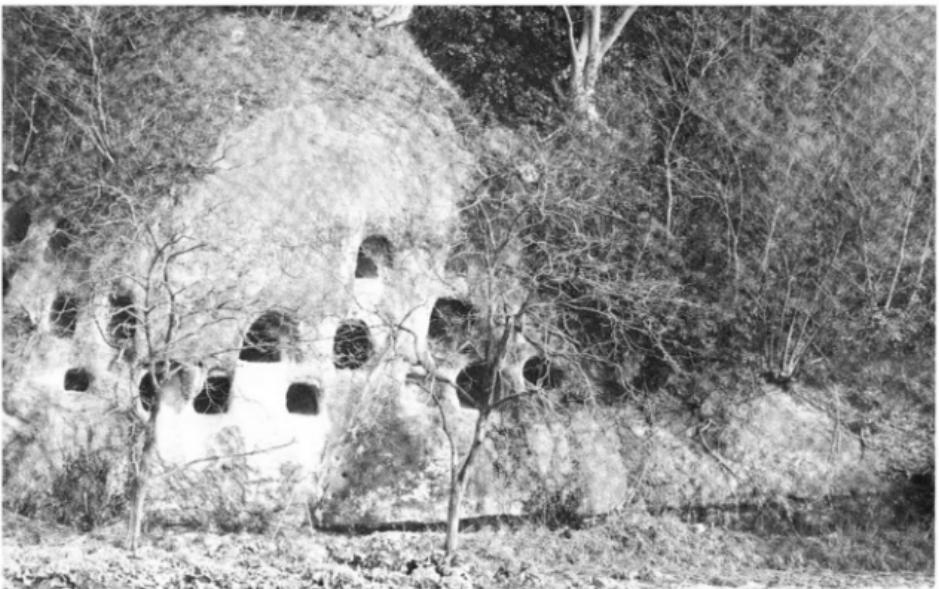


写真10 東側横穴の状況

写真11 東側横穴玄門部状況



写真12 61号墳・62号墳（改造された）・63号墳の状況

写真13 26号墳玄門部状況（前庭天井部閉塞用構とL字形朱彩）

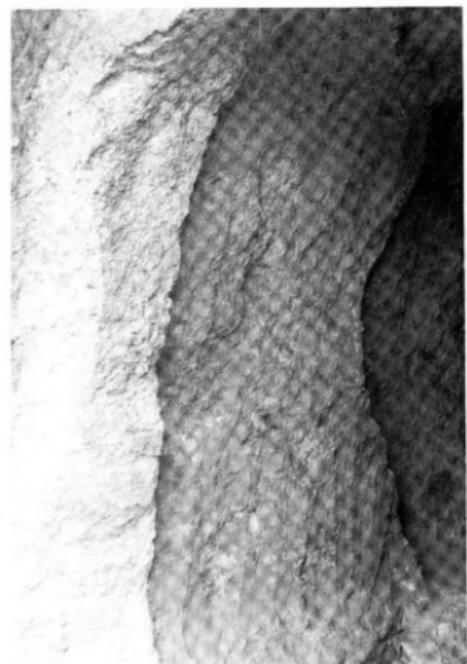
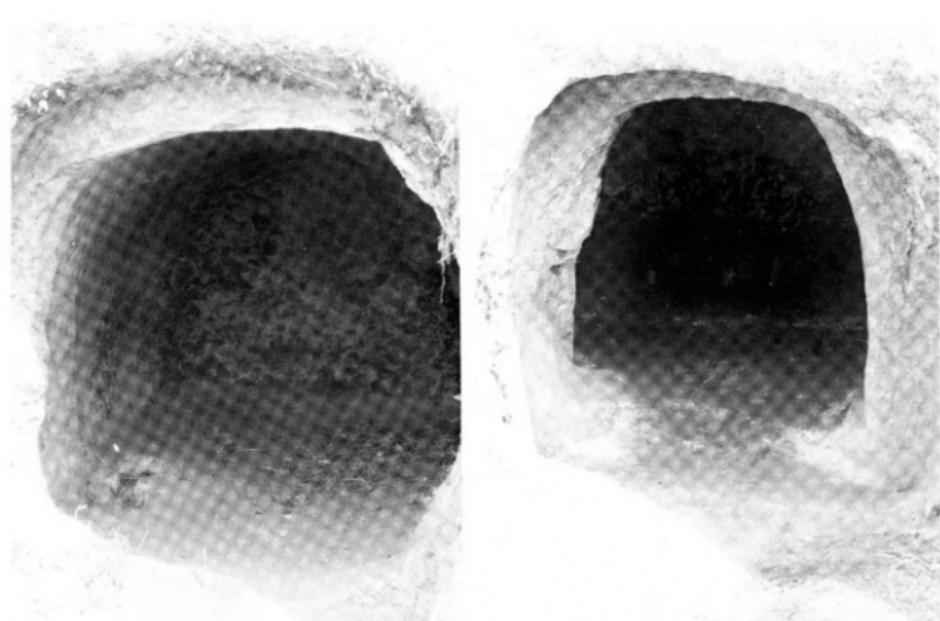


写真14 19号墳玄門状況
写真15 19号墳側壁ののみ痕



写真16 26号墳玄門状況
写真17 26号墳玄室内ののみ痕（玄門部付近）

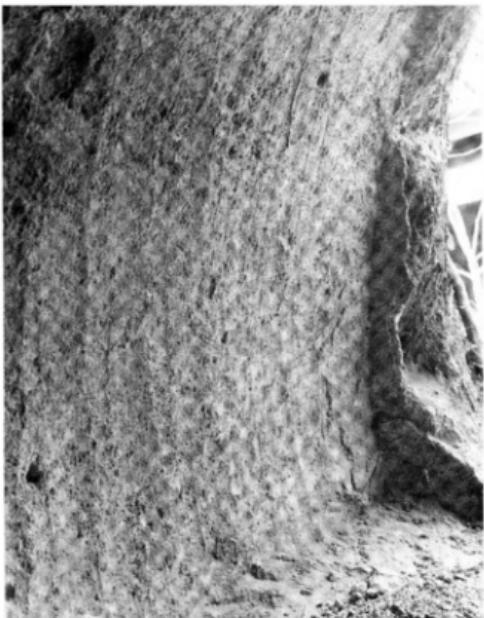


写真18 6号墳側壁のみ痕
写真19 17号墳側壁のみ痕



写真20 16号墳玄室内部状況
写真21 29号墳側壁のみ痕

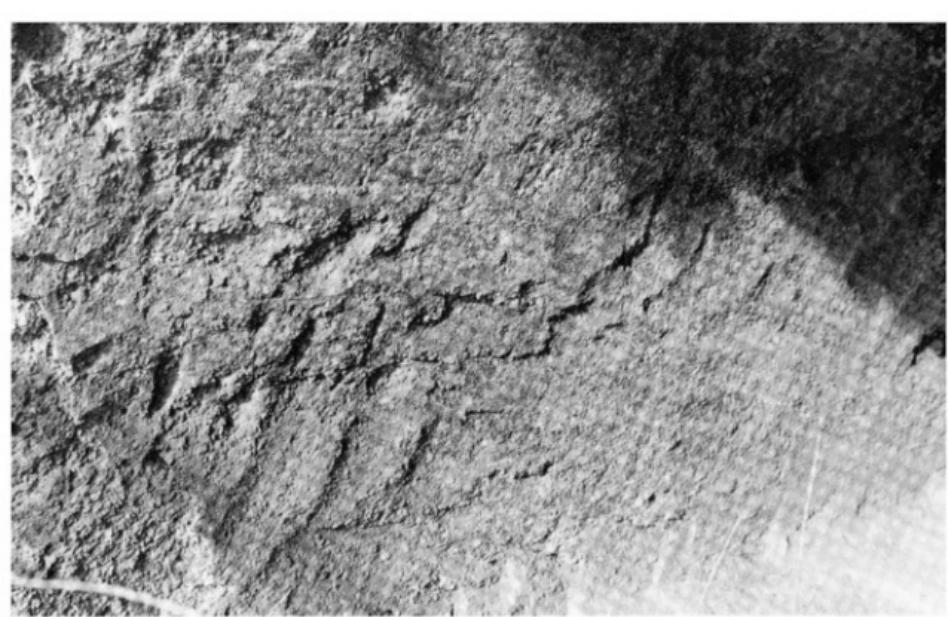
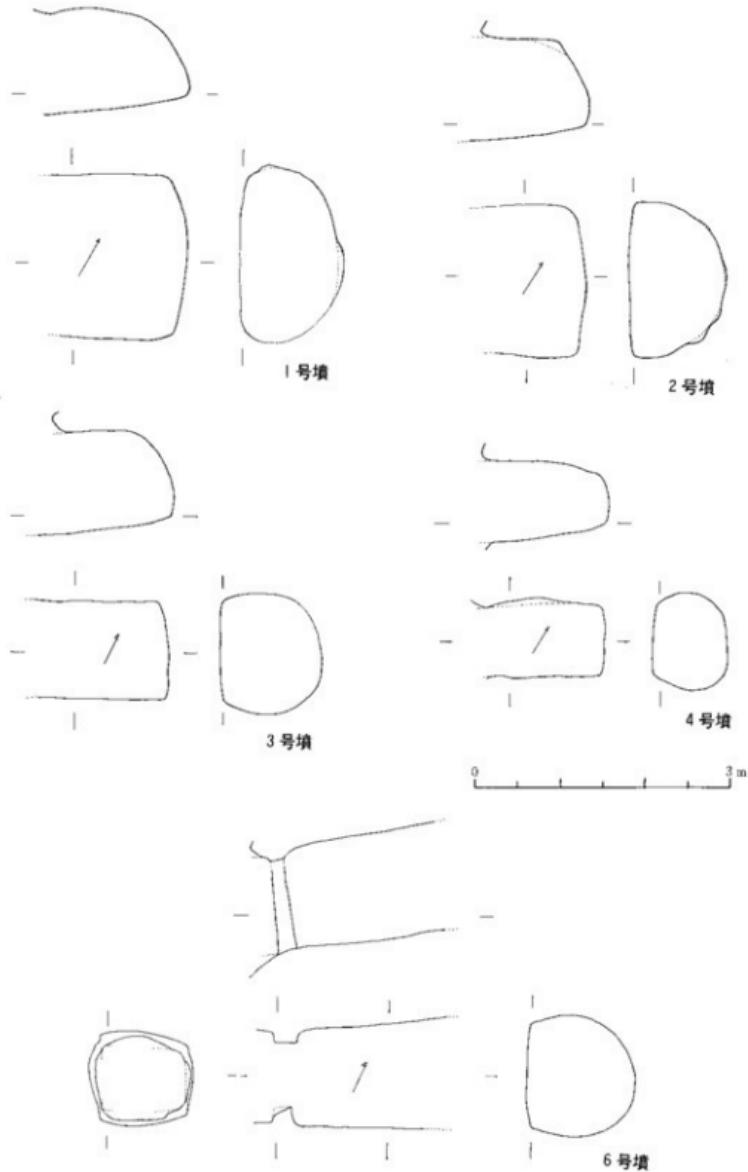
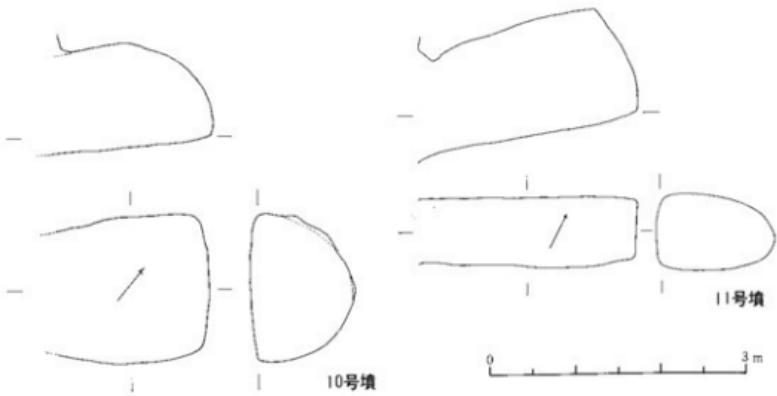
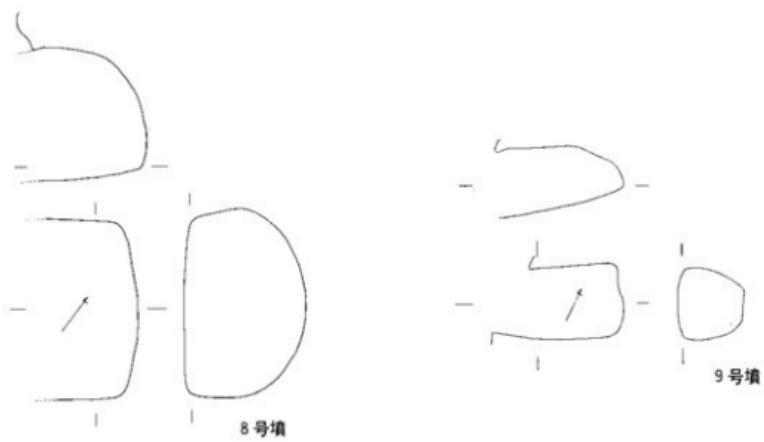
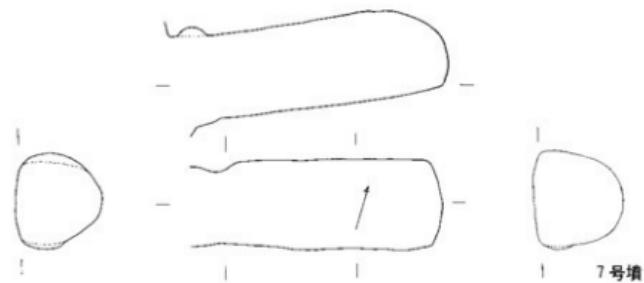


写真22 20号墳側壁の横方向のみ痕

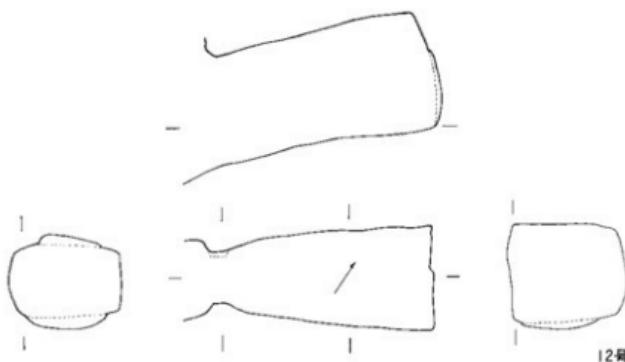
写真23 45号墳側壁の横方向のみ痕



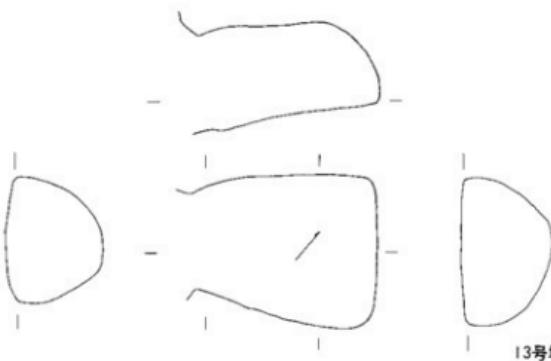
第4図



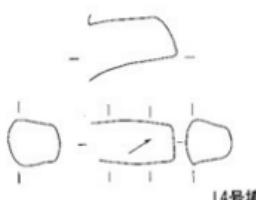
第5图



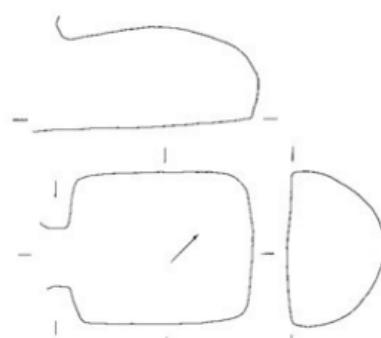
12号填



13号填

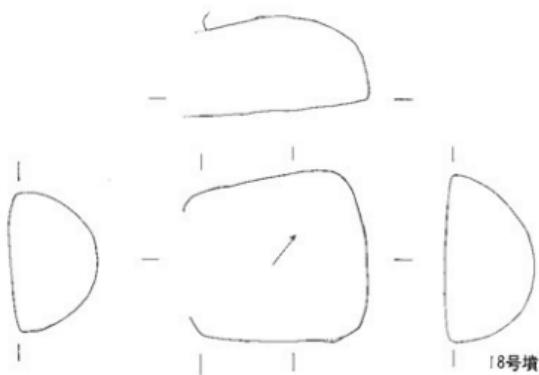
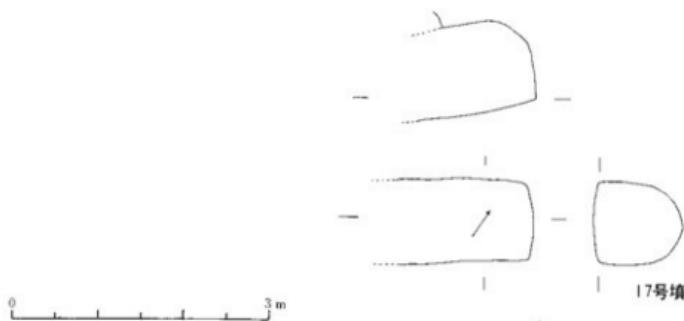
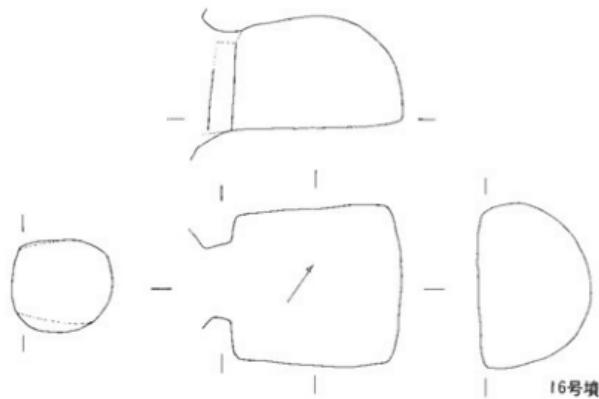


14号填

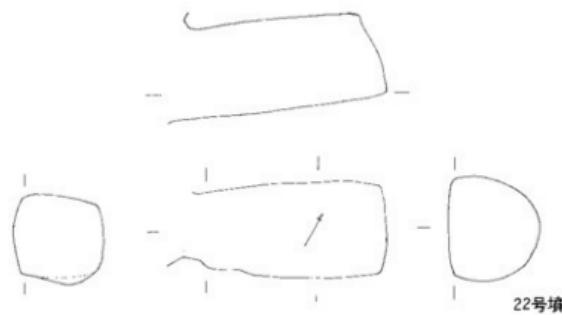
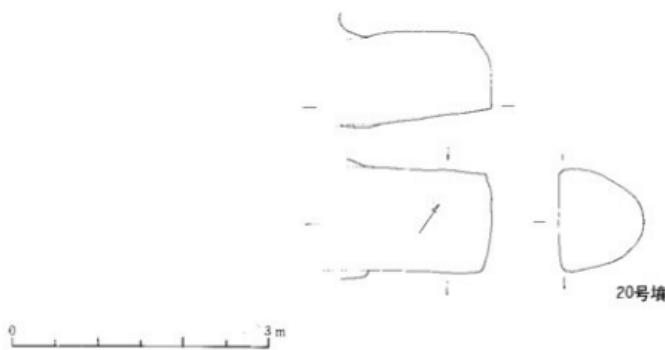
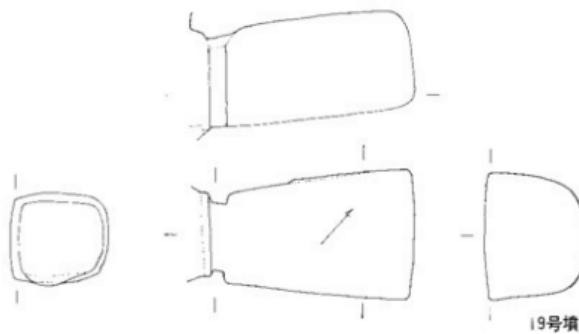


15号填

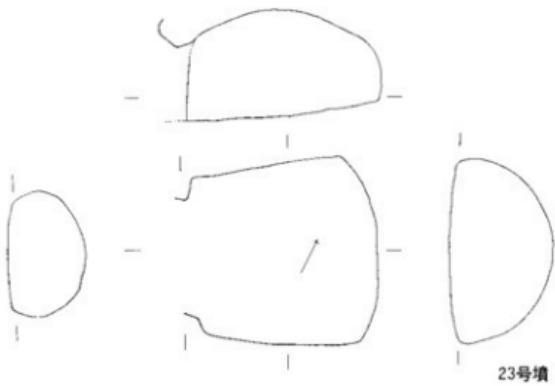
第6図



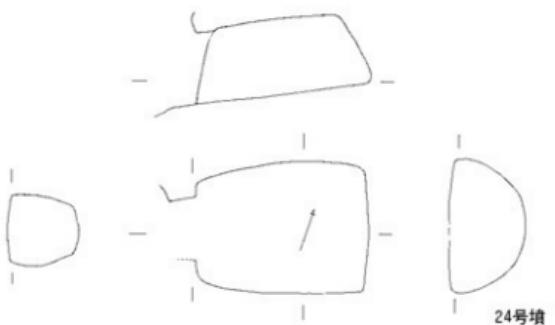
第7図



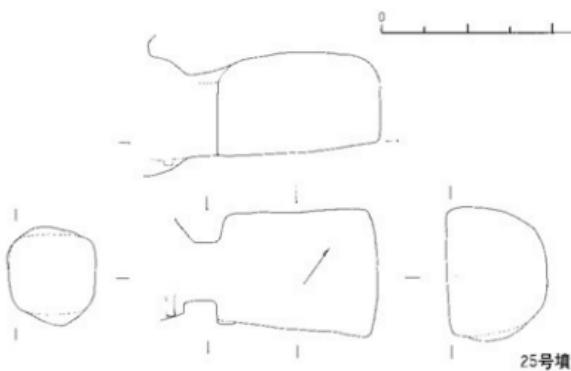
第8図



23号填

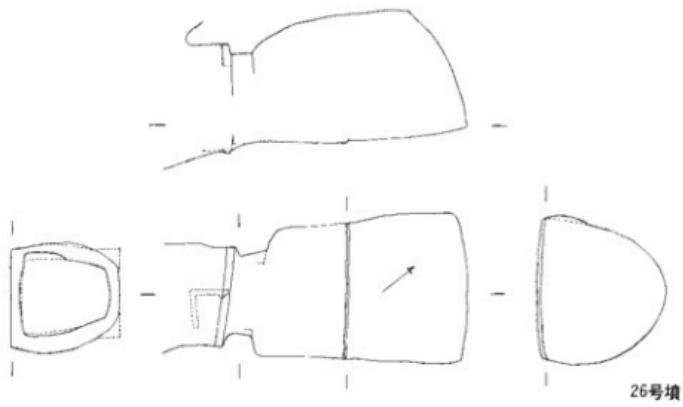


24号填

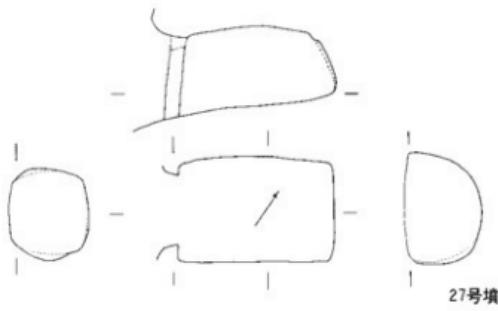


25号填

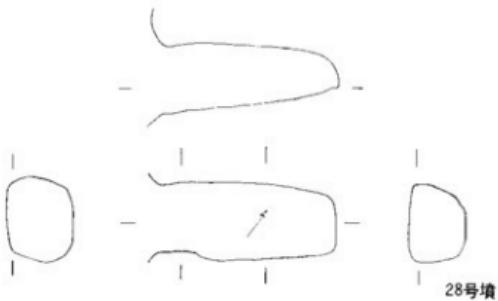
第9图



26号墳



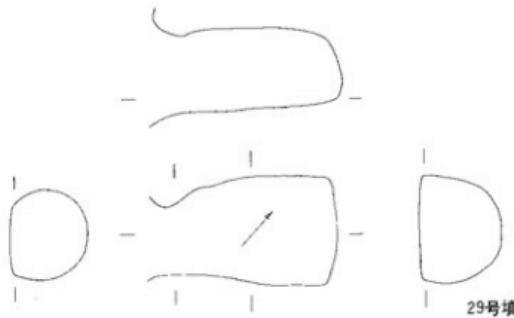
27号墳



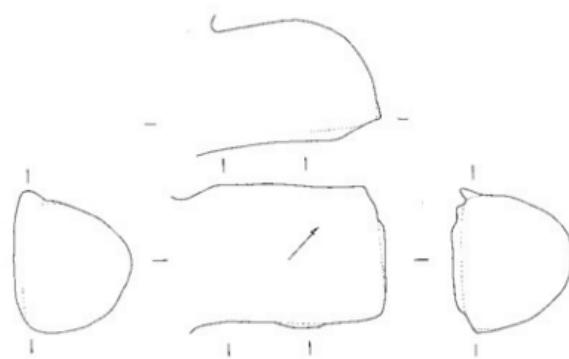
28号墳

0 1 2 3 m

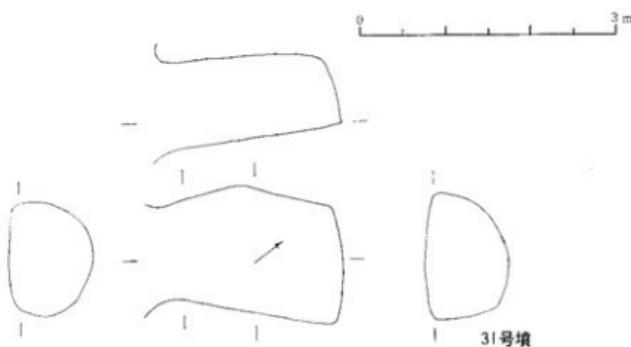
第10図



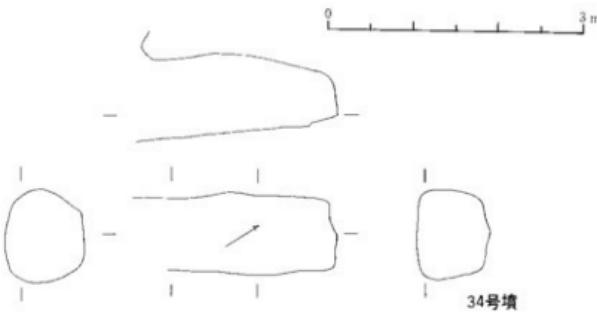
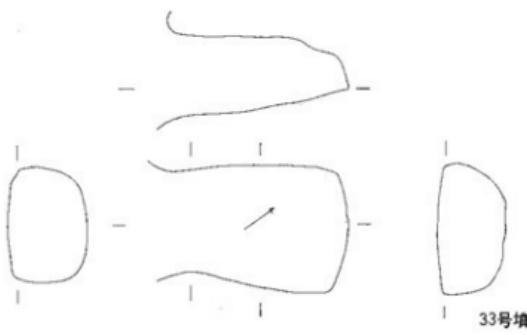
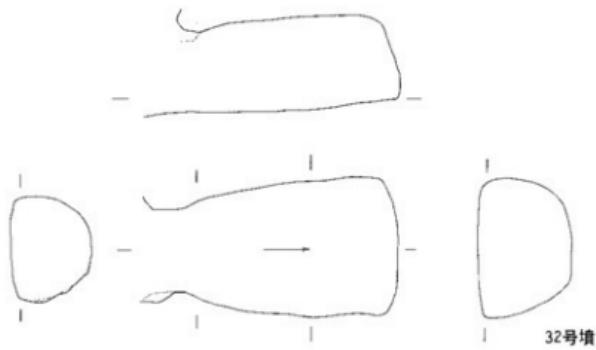
29号填



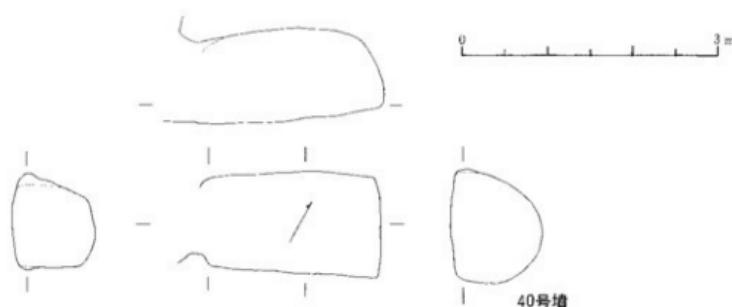
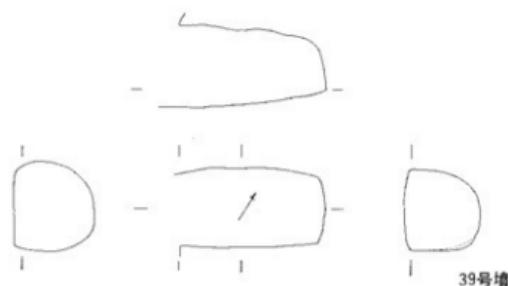
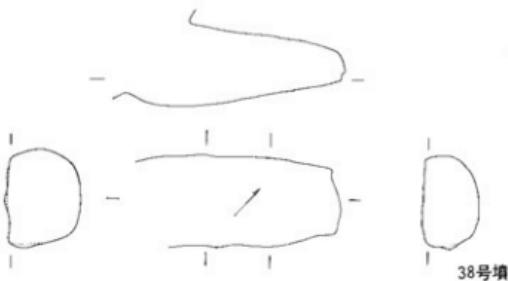
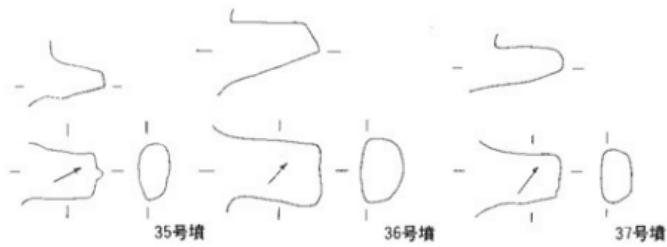
31号填



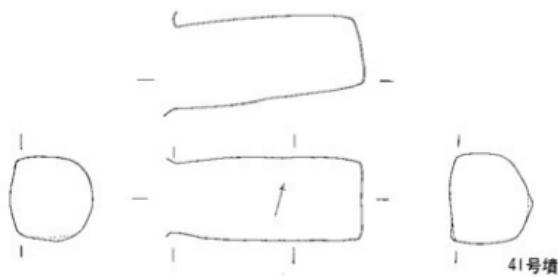
第11图



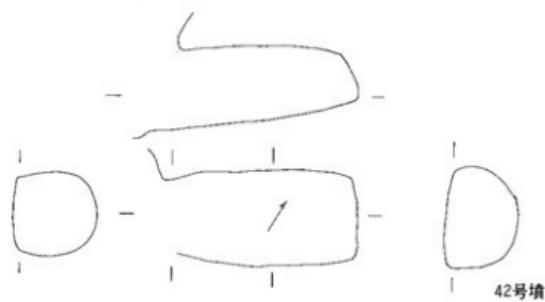
第12図



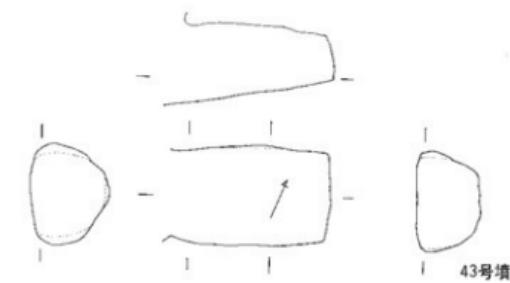
第13图



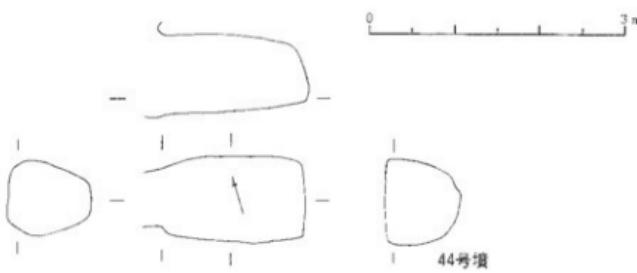
41号墳



42号墳

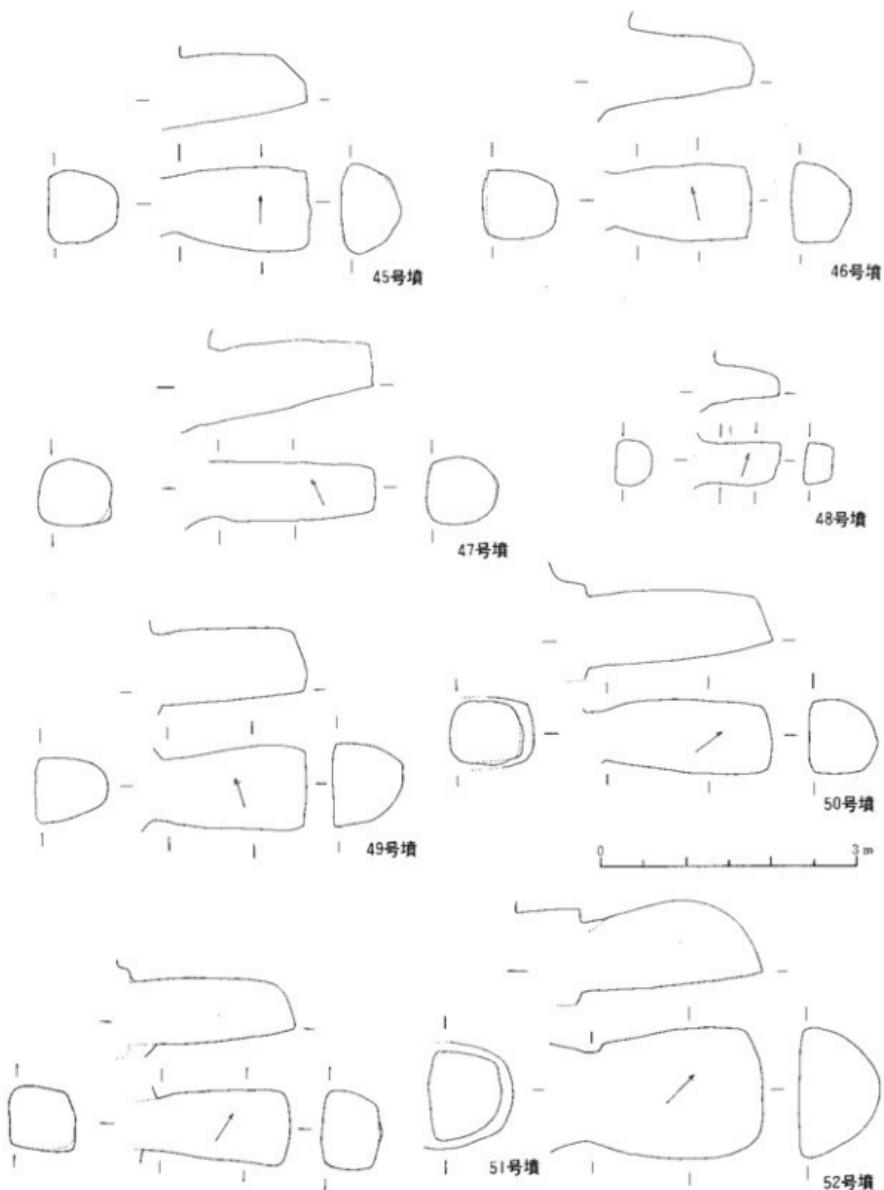


43号墳

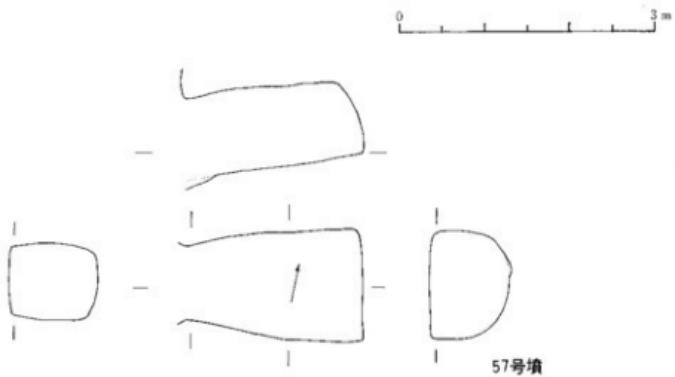
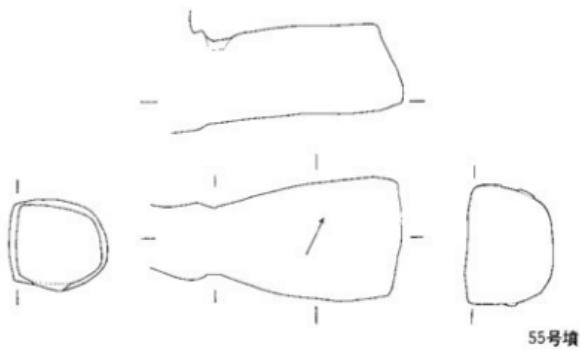
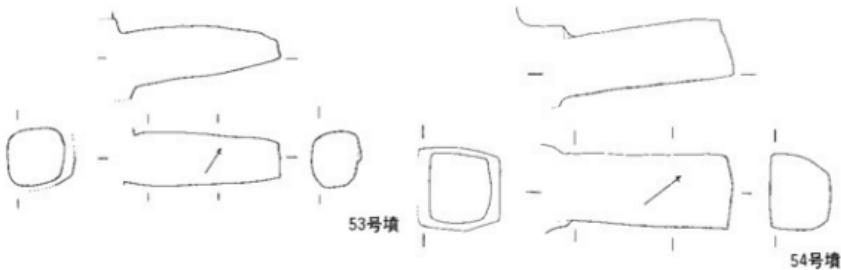


44号墳

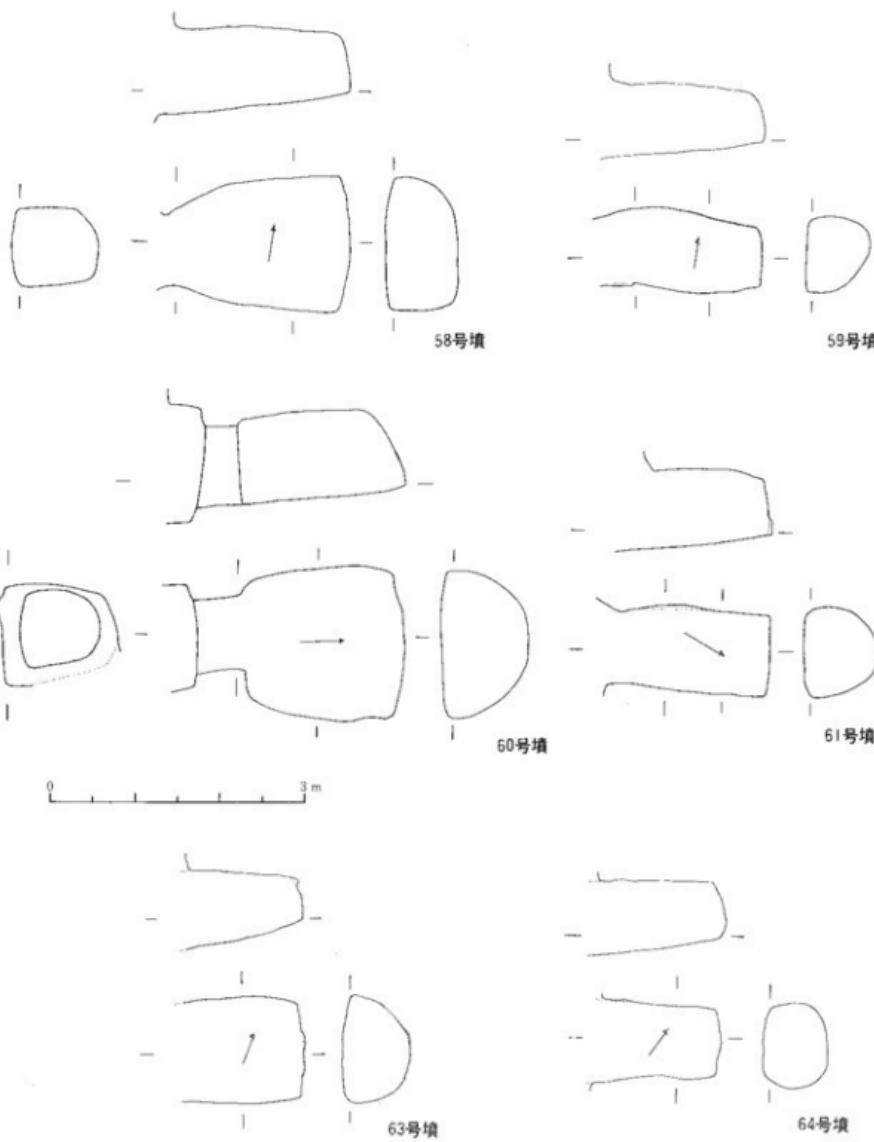
第14図



第15図



第16图



第17图

白石市文化財調査報告書第11号
白石市郡山横穴古墳群

昭和47年5月20日 印刷
昭和47年5月31日 発行

発行白石市教育委員会
白石市桜小路35番地
印刷株式会社 東北プリント
仙台市立町24-24 TEL.2564660/0

